

紗幕の向こう側に巨大なマンガ本が浮かび上がる。
表紙には—— 現代少女マンガ全集」の文字。
ゆっくりと表紙がめくられると、なかから複数のぼくたちが登場する。
ぼくたちは、白いピーターパン・カラーのついた学生服に野球帽をかぶった少年である。

ぼくたちには顔がない。つまり、なつかしのテレビ「透明人間」よろしくグルグルと顔中に繃帯を巻きつけているのである。
ぼくたちは、巨大なペンシルキャップ・ロケットの発射準備を開始する。すなわち、巨大な消しゴムの上に巨大な三角定規の発射台をすえつけ、巨大なパイプ・マッチから引き抜いた巨大なマッチ棒の頭を折り、火薬だけを巨大な鉛筆から取りはずした巨大なペンシルキャップにいくつも詰めこみ、尻をつぶしてそれを発射台にセットすると、火のついた巨大なロケットをペンシルキャップの銀色の腹に炎があたるように置くわけだ。それで発射準備は完了、あとは火薬の発火するのを息を殺して待つだけである。

「この劇は、追憶の世界である。」

ただし、この劇にあっては、追憶はマンガと同義語である。追憶もマンガも同じように現実的ではないから、というのではない。ここでいう追憶とは、現実の意識にともなっていないも新しく生まれかわるようなものであり、それは肌身離さず持ち歩けるポケット・サイズのファンタズムなのである。

あるいは、この劇は、ボール紙を切りだしたような町なみの向こうに太陽が落ち、しかしまだ電信柱の裸電球に灯はともらず、薔薇色の西空の下で、三角ベースのゴムまりも、豆腐屋のラップも、郵便ポストも、走りすぎる自転車オートバイの後ろ姿も、みんな「様に限界を喪失し、パラパラな破片になり、互いに浸透しあう存在となって、無辺際の彼方の星雲にまで届く力線を放射している、そんなつかのまの世界である。」

そんなつかのまのニッッセイキの都会の空に、ペンシルキャップのロケットをとばしてみたい。子供はそう思った。子供はいっだってなにかをとばしてみたいと思うものだ。そして、ペンシルキャップのロケットとは、そんな彼らにとって、生と死のたまゆらに未来を望む飛行者のための偉大な乗り物だったのである。

登場人物

ヤスベール／やさしいおじさん
ぼく 梶コージ／ヤスベール2
もう1人のぼく／出前の女3
父 キューサク／やさしいおじさん3
母 ヨキコ／出前の女2／やさしいおじさん2
田手上／タテガミ／やさしいおじさん1
松島トモコ／出前の女／やさしいおじさん4
松島トモコの父／やさしいおじさん5
藤山教諭／田手上2
医師／やさしいおじさん2
看護婦
ぼくたち
生徒たち
盆踊りの踊り手たち

プロローグ

舞台には紗幕がおりている。
紗幕の向こう側、すなわち追憶の世界はまだ闇にせず
でいる。
紗幕前の舞台上には電信柱が立っている。
ぼんやりと裸電球のともった電信柱には、帽子とコート
と画帖が影のようにはりついている。
きつとどこかの知らないおじさんが忘れていったにちが
いない。
下手には机と椅子が置かれてある。少女マンガ家ヤスベール
女史の仕事机である。そして、その机の上で、彼女はニ
ジッセイキ最後のマンガを描くことになるのである。
次第に高鳴る一九六四年のオリンピック・マーチとともに
に客席が暗くなり、追憶の世界が黄泉がえる。

ヤスベール 着てたら、コート。パジャマは冷えるよ。

田手上 この方がいいんです。私、この寒さと肌で格闘するです。だって、少女マンガは氷河期なんですから。ねえ先生、一体どうしてこのごろの子供はマンガ読まなくなったですか？

ヤスベール みんな純文学へいつちやうからね。

田手上 子供だけじゃないです。いい歳した大学生や大人までがみーんな子供の真似して純文学に哲学書ですからね。一体どうなっちゃうんでしょう、この国は。

ヤスベール あたたびペンをとる

田手上 驚かんでくださいよ、先生。少女ラビット……廃刊だそうです。

ヤスベール 少女ラビットも！？

田手上 これで、残ったのはどうとううちだけになったです。少女マンガ……氷河期です。

ヤスベール やさしく）ありがとうございます。

田手上 え？

ヤスベール それを教えにきてくれたんだね。ぼく、これやらなきゃなんないから…… へ、ペンをはしらせる

田手上 一体どこの原稿なんです？ っていったって、もううちしか残ってないんですよ。ねえ、先生。先生の原稿ならどんな原稿だって必ずぼくがうちに載せるです。だから、今夜

さる。

着々と進行する発射準備の作業に、ヤスベールの声がかぶ

ヤスベールの声 あの日、大地は一人の犠牲者を飲みこもうと待ちかまえていました。物語の時間が主人公の若い日々とともに終わるのなら、あの日からぼくは、終わってしまった物語を何度も何度も繰り返しながら、昨日となにもかわらない今日を暮らしているのです。もしぼくがあのとときユカコーラを飲んでいれば……。ぼくは、あの一本のユカコーラをいつまでも悔やみつつけることでしょう。ユカコーラ殺人事件。……これは、西暦一九六四年十月十日、オリンピック日和の青空に向けて発射されたぼくのロケットをめぐる、いわゆるひとつの物語なのです。

発射準備を完了したぼくたちによるカウント・ダウンが始まっていた。

ぼくたち ……5、4、3、2、1！

舞台上のすべての時間が静止し、影となる。
紗幕に巨大なユカコーラ三〇E 壇が映しだされる。

ビー玉を溶かしてつくったのだとほくに信じられていた、あの緑色のガラス壘である。英字のロゴのはいった壘の腹のふくらみあたりに、マンガの題名が重なって浮かびあがる。すなわち——「ヨカコーラ殺人事件」。暗転。

その一 ニジッセイキの大晦日

闇の中で声が——

声　こんばんわ！ ムジナ出版の田手上です！

紗幕前が明るくなる。そこはヤスベーの仕事部屋だ。下手の机で、ヤスベーが原稿に向かいペンをはしらせている。

上手から防寒服の重ね着で芋虫のように体を太らせた中年の編集者、ムジナ出版の田手上が紙袋をさげて登場。

田手上　イヤー、今夜も冷えるですね。ハ、防寒服を一枚一枚

剥きとりながら「あれ！？ 先生、まだ仕事してるですか？ ヤスベー　これだけはやっちゃまわないと……」

田手上　大晦日に原稿とりになるバカがいるですか！？

ヤスベー　そうじゃないんだけどね……

田手上　でしょ？　じゃ、もうやめてソバ食いましょう、年越しソバ。

ヤスベー　おなか、へってないから……

田手上　縁起もんですよ、先生。いま角のヤブに出前たのんできましたから。それからこれ　ハ、紙袋からとりだしたセブンイレブンの袋を机の上にデンと置き、セブンイレブンのオセチ。

ヤスベー　顔を上げ）田手上くん。

田手上　ハ？

ヤスベー　強い口調で）邪魔だよ。

田手上　おすおすと袋をどけ）……先生。私、お邪魔ですか？ 先生、ぼく、パジャマでお邪魔です！

田手上、パツとコートを脱いだ。その下はパジャマだった。

田手上　ハッ悪そうに）……

藤山教諭 呼んで 学級委員。タテガミ。

上手から、野球のユニフォーム姿の少年タテガミがハンカチで手をふきながら登場。ムジナ出版の田手上に実によく似ている。

タテガミ イヤー、ウンコの切れが悪くって……

藤山教諭 だれだ、この子。

タテガミ では、ご指名にあずかりまして、わたくしタテガミからご紹介いたします。うちのクラスの梶 コージです。

藤山教諭 お辞儀して。担任の藤山です——って、知ってるよ、そんなこと。梶 コージくんじゃないか。ぼくになあ？

先生、ちよっとど忘れしたんだ。で、梶君、きみ、そんなとこでなにしてるんだ。

ぼく いやあ、えへへ……。

藤山教諭 言わなきゃわからないぞ。

タテガミ 先生。梶は教科書忘れたんです。

藤山教諭 知ってるよ、そんなこと。今月の目標は「忘れものをしない」。そうだったね、梶君。ところがきみは国語の教科書を忘れた。だから、先生が立たせたんだ。

タテガミ 先生。梶の忘れたのは理科の教科書です。

はやめましようよ。…… むみじみと 私のイナカにはね、大晦日の「ねんころ」ってあるですよ。「ねん」っていうのは「眠らない」って意味です。昔から大晦日は一晩中寝ないで、いろりのまわりで茶飲み話なんかして夜をあかすです。私、今年の大晦日だけはどうしても先生と、そんなふうにごしたくて。だって、今夜は特別な夜じゃないですか。

ヤスベー だから！ へ、手を止め……だからぼくは、こいつを仕上げちまいたいんだ。だって、今夜は西暦二〇〇〇年の大晦日だもの。ニジッセイキの大晦日だもの。

そこへ上手から声——

声 おこんばんわ！
田手上 ソバ屋だ！？——とにかく先生、ソバ食いませよ、ソバ。ニジッセイキ最後のソバ。

ト、上手へ去る。

ヤスベー、机の上の原稿をめくり、そのなかの一枚を手に、読む。

ヤスベー ……ねえ、おとうさん。あしたのぼくはだれでしょう

う。ねえ、おかあさん。永遠の遠国はどこにあるのでしょうか。
紗幕の向こう側に、彼方を見はるかすように立ちつくす父
と母と、そしてぼくの姿が浮かぶ。……この空の彼方には、
緑の野と、小鳥と、そしてぼくによく似たもう一人のぼくが
住んでいて、きつといつか二人はめぐりあう。そんなたい
けな予感に、体のふしぶしが融けてしまいそうになるのを必
死でこらえながら、ぼくは父と母の手を握っていたのです。
……オリンピックまであと一〇〇日。夏はもう始まっていま
した。――」

授業の始まりを告げる鐘とともに、ぼくの背後に一九六
四年のぼくの教室が浮かび上がる。ヤスベ―は机に向か
いペンをはしらせる。

その二 われ思つ、夢にわれあり。

夏休みも間近な教室では国語の授業中だ。
中央奥に担任の藤山教諭が黒板を背に立っている。
黒板には「今月の目標 忘れものをしない」の貼り紙。

黒板をはさんで「**ハ**」の字にならんだ机に向かい、教科
書を開いた生徒たち。
ぼくはなおも立ちつくしている。立ったまま眠っている
のかもしれない。
生徒の一人が立ち、教科書を読んでいる。その声がぼく
には夢のようにきこえる。

生徒1 ……太郎は、少年と友だちになって、自分は少年か
ら金の輪を一つ分けてもらって、往來の上を二人でどこまで
も走ってゆく夢を見ました。そして、いつしか二人は、赤い
夕焼け空の中に入ってしまった夢を見ました。明くる日から、
太郎はまた熱が出ました。そして、二、三日目に七つで亡く
なりました」座る

藤山教諭 はい、そこまで。……エー、体が弱く、そのためい
つもひとりぼっち、友達のなかった太郎は、金の輪をまわす
少年に出会いました。そして、そのたったひとりの仲間と一
緒に、金の輪をまわしながら、あの世へと――教室の後ろ
に立ちつくすぼくに気づきだれた、そこに立っているのは。
授業中に勝手に立ったらいけません。ナ、近寄りん？ き
み、どこのクラスだ？
ぼく ハッと目をさましども。

の空の彼方には、緑の野と、小鳥と、そして、ぼくによく似たもう一人の――

藤山教諭 真剣に夢みたいなこと、いうんじゃない！
ぼく 夢？ ……なんでそんなこというんですか！

教室の入り口に一人の少女がユラリと立つ。女子の学級委員の松島トモコだ。

ぼく 松島！？

松島 夢うつつに たすけて…殺されるわ！

ト、気をうしないそうになる。
あわてて駆け寄る藤山教諭の腕のなかに松島はくずおれる。

藤山教諭 松島！ きみ給食は？ 食べたのか？

松島 パチッと目をあき あたし、ずっと夢を見てました。

とてもこわい夢でした。だれかが殺されそうになる夢でした。

このクラスのだれか……ト、腕からはなれ生徒たちを見まわす。ゾッとする生徒たち

藤山教諭 なんだ、夢か。

藤山教諭 先生メチャメチャ悲しい。そうだとタテガミ。ええ？
先生いまなんの授業してたんだ？

タテガミ 国語です。

藤山教諭 そおだ。理科は一時間目だ。――エエッ！？ ト、
驚いて「ぼく」を見て。だつてきみ、いまもう五時間目だぞ。

ぼく ……

藤山教諭 じゃあきみ、朝からずっとそこに立ってたのか！？
まるで透明人間だな。どうしてだ。どうしてきみ、だまつて
立ってたんだ。

ぼく 先生に言われたから。

藤山教諭 きみは先生の家来か？ きみは先生に言われたら力

道山と結婚するのか？

ぼく しません。

藤山教諭 長島選手のオシッコ飲むのか？

ぼく 飲みません。

藤山教諭 そうだろ。

ぼく おじさんなら別だけど。なんてね。

藤山教諭 ハッとして。だれがおじさんだ。

ぼく やさしいおじさんて、ぼくの家来なんです。へへ。

藤山教諭 きみ、先生のこと、怒ってるのか？

ぼく だいじよぶ。おじさんにいいつけたりしないから。

藤山教諭 ……？

タテガミ 藤山教諭の小耳に）気にせんでください。梶はアホなんです。

藤山教諭 じゃ、きみたちはなんだ。なんでみんな梶くんずつと立ってるの、だまってたんだ。

タテガミ その疑問はこもつともです。しゃあけえ、この組はあんたの組やし――

藤山教諭 わしは組長か。できみらみんなその家来なんだな。タテガミ 子分、じゃないですか、先生。

藤山教諭 もうよろし。呼んで 学級委員。松島 …… 返事は無い。教室のなかに 一つだけ空席となった席がある。松島

はどうした？

タテガミ 松島は今朝の朝礼で倒れまして、そのまま保健室の方で――

藤山教諭 朝からずっと寝てるのか！？

タテガミ まだド忘れですね、先生。

藤山教諭 梶くん。はやく自分の席につきなさい。

ぼくは自分の席に座る。

藤山教諭は黒板の前に立ち、今月の目標 忘れものをしない」の張り紙に気づき、それをベリベリと破ると客席

に投げ捨てる。

藤山教諭 エー、みんなが生まれる少し前、私たちは戦争を

しました。一つの目標のために私たちは戦争をした。そんなことをいう人がいます。でも、先生はそうは思いません。その

戦争に負けるまで、私たちはみんな一人の神様の家来だった。そんなことをいう人もいます。でも、先生はそれもそう思

いません。ずっとずっとながいこと、私たちはみんななにかの家来でした。大工さんは棟梁の、床屋さんは親方の、漁師さ

んは網元の、消防士さんは消防署の、会社員は会社の、おかあさんはおとうさんの、おとうさんはおじいさんの家来でし

た。必ずしも一人の神様の、ではありませんでした。そして、戦争に負けて、私たちははじめて自分自身の家来になりました。

私たちは自分自身の家来であり、同時に自分自身の神様になったのです。――

ぼく 手をあげ、大声で 先生！

藤山教諭 なんだ、梶くん。

ぼく それじゃ、自分自身でゆーのは二人いるんですね。藤山教諭 二人なのか、もっとたくさんなのか、いまはまだ先生にはわかりません。

ぼく ぼく、知っています。おじさんが教えてくれたんです。こ

ヤスベール ……ねい、ユウちゃん。

ぼく 顔を上げ、ヤスベールの目を見て ……

ヤスベール 勇気があるかい。

ぼく ……うん。

ヤスベール ついてくるね。

ぼく どこへ？

ヤスベール 夏の扉の向こう側。きみの夏休みへさ。

ヤスベールとぼくは客席に背を向け、マンガの壁と相対する。

ヤスベール 呪文のように「アノクタラ、サントシル、ソワカ！

ト、唱えるや、マンガの壁が音もなく割れる。

ヤスベールはぼくの肩を抱き、二人はマンガのなかにのみ

こまれるように消え去る。

上手からムジナ出版の田手上が登場。

田手上 イヤー、だれもおらんですよ、先生。ソバ屋じゃなかったのかな。でも、たしかにきこえたもんな、「こんばんわ」って。どっからきこえたんだろ。ト、下手の机まできて、描き

松島 でも、ほんとなんです。ねえ先生、たすけてあげて。ト、

救いを求めるように手をさしのべ。ねえ、タテガミくんも。

ねえ、タコヤマくんも…アンジョーくんも…生徒たちは思わずあらずさる。松島はぼくと目があう。ぼくは真っ赤

になって目をふせる。たしかにこのクラスのだれかだったの！

…あたし、体よわくてあんまり学校来られないけど、いつもみんなのこと、家で夢に見てました。夢のなかでいつもみ

んなと一緒でした。いまこうしてあたしとみんなが一緒にいるのがほんとうなら、同じあたしとみんなが、別のとき別の

場所にいることだってほんとです。もしそれが夢なら、いまこうしてあたしとみんながいるのだって夢。でなきや、そんな

のひどいわ。…われ思う、夢にわれあり。

自分の赤いランドセルを背負い教室を出ていこうとする
松島を、一同なすすべもなくただながめている。

松島 (共にニコリと微笑みかけて) さよなら。あたしひとりでもきつとたすけてみせるわ。

ト、去る。

授業終了の鐘が鳴る。

タテガミ 起立！ 礼！
藤山教諭 松島！

ト、松島のあとを追って去る。
生徒たちも田手上を先頭にワイワイと去る。
だれもない教室にぼくだけがひとり残される。
ぼくは黒板に大きく書いてみる。すなわち――

ぼく われ思う、夢にわれあり……

ぼくは泣いているのかもしれない。わけもなく悲しかったのだ。

ヤスベーが仕事の手をとめ、顔を上げる。

ヤスベー ぼくはいまでも、ニジッセイキの悲しみが交錯した
ような青い都会の夕べ、街角のプラタナスの下でふるえてい
る白い電灯を見ると、なぜかコウちゃんが泣いているように
思われてならないのです。

ぼく 彼方へ叫んで おじさん！
ヤスベー ……

ぼく ねい、おじさん。
ヤスベー やさしくこたえて なんだい、コウちゃん。

ぼくの背後に巨大なマンガ本が壁のようにそびえ、教室
をのみこむ。
ヤスベーは机から立ち上がると電信柱に歩み寄り、裸電
球の仄暗い明かりのなかで影のように電信柱にはりつい
た帽子とコートをひきはがし、身体にまとい、画帖をか
かえる。その姿はもう、なんてやさしいおじさんだ。

ぼく 夢じゃないもんね。ほんとにいるんだもんね。

ヤスベー 永遠の遠国にいるあの子のことかい？

ぼく あの子はぼくの家来？ それともぼくの神様かしら……

ヤスベー 町はずれに落ちていた。街灯の下に落ちていた。――
――なんだ？

ぼく ええっと……第二ヒント！

ヤスベー あの子がそれをひろっても、けしてマントにやなり
ません。

ぼく わかった！ ぼくの影。

ヤスベー 正解。――第一ヒントでわからなかった？
ぼく ……ねい、おじさん。もっとそばへ来てよ。

父 応援なんてもうヤメヤメ！ ㊦、耳からイヤホンをむしりとり、ラヂオを抛る）
ぼく ぼくのラヂオ！？ ㊦、あわてて拾う）
父 飯くれ。
ぼく 国鉄なんか応援するからいけないんじゃないか！
父 なにッ！？
ぼく だから、おとうさん、ダメなんだ！
母 コウちゃん。
ぼく ……初めから負けるってわかっているのに。
父 ……
母 父に茶わんをさしだし。ハイ。ご飯。
ぼく ペコリとごっつあんでした。
ト、箸を置くと、ゴロリとその場に横になり、鉱石ラヂオのイヤホンをそっと耳にあてる。
カチャカチャと父の箸が茶わんにあたる音。
父 コージ。ラヂオなんかもうきくな。
ぼく ……
父 ポツリとラヂオはテレビに負けるよ。
ぼく あちら向きにラヂオをききながら、ポツリと 国鉄は

かけの原稿に目がとまり、読んで その疑問は「もともとでもす」ンン？ つづけて読んで」トやあけえ、この組はあんたの組やし」…アア！？ また勝手にひとのキャラクター使っちゃって。先生先生。あれ？ ㊦、あたりを見まわし）
トイレかな？ 先生？ ……先生！
ト、呼びながら下手へ去る。
田手上的声と交錯して下手からなつかしい声が――。それはぼくの母の声にちがいない。
母の声 コウちゃん… コウちゃん！
その三 ヨキコハ イクヨ。
マンガの壁が割れると、そこは安アパート金井荘の六畳一間のぼくの家。
夕餉の茶ぶ台に向かい手酌でビールの父は、ぼくの鉱石ラヂオのイヤホンを耳に野球放送をきいている。巨人対国鉄の熱戦？

茶ぶ台の脇でぼくは アノクタラ、サントシル、ソワカ
……」と忍者よろしく呪文の稽古だ。
外からは盆踊りの太鼓と 『東京五輪音頭』が遠く近くき
こえる。

下手から母が味噌汁の鍋を持って登場

母 ……コウちゃん！ 茶ぶ台につき）はやく食べちゃって
よ。
ぼく ハイ。

ト、茶ぶ台につき、ご飯をかつこむ。
母と「ぼく」のタクワンを噛みしだく快い音がしばし食
卓を支配する。

ぼく 父に どっち勝ってる？

父 ……

ぼく ねえ、長島は？ ホームラン打った？

父 打てるもんか。こっちや金田だからな。

ぼく おとうさん、ラヂオ交替。

父 ……

母 はやく食べなさいと コウちゃん。盆踊り行くんでしょ。

ぼく 再びご飯をかつこみながらブツブツと だって、ぼく
の鉱石ラヂオなのに…… 母に）ねえ。うちのラヂオ、もう
なおらないの？

母 おとうさんにきいてみたら？

ぼく おとうさん、うちのラヂオもうなおらないの？

父 ……

母 コウちゃん。盆踊りだれと行くの？

ぼく ひとり。

母 友達誘いな。

ぼく いないもん。

母 こわいおじさんにチンチンちよん切られるよ。昨日も一人
やられたんだから。

ぼく ……

母 ユカタ出しといたからね。

ぼく いいよ。

母 せっかく出したのに。

ぼく ヤダ。ユカタなんか女じゃん。

母 見してくれたっていいじゃんよ。コウちゃんのユカタ姿。

へへ……

父 いきなり）バカクソッ！ 長島のヤロー！ ——

ぼく 金田打たれました！ 国鉄スワローズついに二〇連敗！

母はそれを強引にぼくに着せようとする。

ぼく やめる触るな。乳クセー。 ㄴ、逃げまわる

父 いやだっていうものヨセッ！

母 なにかを必死でこらえて ……

父・ぼく 母の様子に気づき ……!?

いきなり母が嘔吐する。一瞬にしてユカタは吐瀉物にまみれる。

背景のマンガの壁の向こうからヤスベーが現れる。ヤスベーの姿はぼくにしか見えない。

父 母を腕に抱き どうしたんだ？ ……おい。ヨキコ。

ヤスベー ヨキコハ、イクヨ。

ぼく ギョツとしてふりかえり) え？

ヤスベー ヨキコハ、イッテシマウノダヨ。

父 コージ。すぐに二丁目の先生呼んでこい！

ぼく ぼく…盆踊り行かなくっちゃ！

『東京五輪音頭』が場を圧倒する。

マンガのなかからユカタ姿の踊り手たちがくりだし、お

巨人に負けるよ。

父 ま、いまだきテレビくらいなくっちゃな。

ぼく ガバツと父に向きなおり) テレビ買うの!?

父 ふふふ…

ぼく ねえ、いつ買うの!?

父 (ニヤニヤと) まだ買うとはいってないさ。

母 そうよねえ。ラヂオなおすお金もないんだから。

父 ムツとして) オイ! —

ぼく (父に) ラヂオならこれ、ぼくのあるもんね。交替でき

けるしね。買おうよ、テレビ。

母 夢よ、いつもの。おとうさんのお得意。

ぼく ウルサイ!

母 かなわぬ夢のキューサクちゃん。

父 オイってきこえないのか。

母 なアに、キューサクちゃん。

父 これはなんだ。ㄴ、皿からタクアンをつまむと、皿中のタ

クアンが見事につながっていた) なんだってタクアンをつな

げて切るんだ。

母 しようがないでしょ。マナ板へこんでんだから。

父 なら、そんなもの捨てて新しいの買えばいいだろうが。

母 アタシだって買いたいわよ。でもアンタ、自分が一体いく

ら給料もらってきてると思ってるの？ え？
父 オ、オレのいつてんのはな、毎日疲れて帰ってきて、オカズくらいまともなもん食わせろってことだ。
母 アタシだってそう思うから、毎日少しでもおいしいものを食べてもらおうってマナ板も買わずにやっつてんじゃないかよ！
父 ウクッ……そそそれがキサマのつとめだい！
母 なによっ。アンタみたいな屁こき虫にキサマ呼ばわりされるおぼえはない！
父 アッアッ、言ってくれたな。ト、拳をふりあげ コノッ コノッ……。
母 わあっ！ ト、泣きくずれ あの晩アタシが盆踊りなんか行かなきゃよかつたんだア……
ぼく 盆踊り？
母 そうよそうよ。十年前に盆踊りでアンタなんかと出逢ってなきゃあ、今頃こんなタクアンがつながったことなんかで叱られずにすんだのに……
父 オレだってあんなクソ盆踊りでキサマと逢ってなけりや、今頃気だてのいい嫁っこと暮らしてらあ！
母 食器をサッサとかたづけながら コウちゃん、はやく行きな、盆踊り。
ぼく いきなり自分にふられて エエ！？ だつてさア……

父 オ、オイ！ オレはまだ食べてんだぞ。
ぼくは意味もなく畳の上をゴロゴロしていた。
母は食器を台所へ運ぼうとしてぼくにつまずきオーバーにこける。
母 もうたくさん！ こんなキョクツな暮らし。ト、台所へ去る
父 キサマがここがいつていったんじゃないか！ もう忘れたのか！ ……母の口真似で あアア、アナタ、このアパルトにしましょうよ。金井荘なんて、名前が素敵だわ」台所にオレはいつたよな！ ……金井荘のどろがそんなに素敵なんですか、ヨキヨキさん。……そしたらキサマなんて！ だつて、そのうち夢がカナイソー」へへんダ。アホー！ ……オイ、きいてんのか！ アホーっていつたんだぞ！
ぼく おとうさん。ぼくね、アホのまねうまいよ。ト、アホな顔で あんナ、わてアホやんねん……
父 あきれかえって ……
母がユカタを手にもどった。

ぼく 独白 消えた!?

生徒たち スットライーク! キャッチャーの生徒がタテガ

ミにボールを投げかえす)

ぼく たんま。タテガミさア、消える魔球はナシナシ。

タテガミ ちばてつや作。少年マガジン連載。『ちかいの魔球』。

ぼく フツの球でいこお。

タテガミ おまえ、消える魔球がほんとにあると思ってるの?

ぼく なにがよ。

タテガミ マンガの読み過ぎだ。梶。ト、問答無用にピッチャー、

第二球、ふりかぶりました!

ゆつくりと投球動作にはいるタテガミを中心に二回グル
ルと舞台を二〇度回転する。

ふたたびフシユーツーズババン!

生徒たち スットライーク!

ぼく 独白 あるじゃん。消える魔球、あるじゃん!?

タテガミ キャッチャーからの返球を受け) 梶! どうして

バット振らねんだよッ!

ぼく タテガミさア、ぼくおまえの家来でいいわ。

タテガミ ド真ん中投げてんだろ!

茶の間をのみこむ。

呆然と立ちつくすぼくの頭のなかで、踊りの輪がメリー

ゴラウンドのようにグルグルと空しく回転する。

その踊りの輪のなかにぼくは、クラスメイトの生徒たち

やタテガミやユカタを着てたたずむ松島や、そして、ぼ

くによく似たもう一人のぼくの影を二瞬見たような気が

する。

その四 消える魔球

原っぱ。

暮れなずむスミレ色の空。盆踊りの太鼓が遠くにきこえ

る。

ぼくがクラスメイトの生徒たちに囲まれている。

ユニフォーム姿のタテガミが、佐々木小次郎よろしく背

中にしよった長いバットをスランと抜き、切っ先をぼく

に向ける。

タテガミ 遅いぞ、梶 コージ。さあ、おれと勝負だ！ ㄒ、

バットをぼくに抛る)

ぼく あやうく胸でうけとめ) ヨッ、タテガミ。

タテガミ 約束の時間に遅れてくるなんてよ、おまえ宮本タケ

ゾーのつもり？

ぼく タケゾーじゃねえよ。それムサシって読むんだ。

タテガミ 子供のときはタケゾーっていったんだ！ 知らなかつ

たろ、梶。それでよ、タケゾーは牛若丸と勝負して負けて家

来になって、宮本武蔵坊弁慶になったんだ。だから、おまえ

もおれに負けて家来になれば？

ぼく なにいつてんだよ、おまえ。

タテガミ いくぜ、梶！

ㄒ、舞台中央で白球を握った腕をブルンブルンまわす。

生徒たちはクラブをはめ、田手上の背後で守備位置につ

く。

舞台前面にはキャッチャー役の生徒が客席に背を向け座

る。

ぼく 勝負なんかしねえよ。

タテガミ なんだだよ！？

ぼく 負けるもん。ぼくにおまえの球、打てるわけないじゃん。

タテガミ じゃ、これなんだよ。ㄒ、墨で書かれた手紙を見せ

る)

ぼく 表を読んでちょーせんじょお！？ ……知らねえよ、

そんなの。

タテガミ 梶 コージって書いてあんだろ。ㄒ、ぼくに抛る)

ぼく 開いて読んで、タテガミくんやら。きみはたいそう

スゴイ球をほおるそうだが、ぼくにはヘナチヨコ球だ。夜七

時。盆踊りで待ってるぜ。じしん・かみなり・梶 コージー

ーほんとだ！？

タテガミ いくぜ！ ㄒ、有無をいわさず投球動作に入る)

ぼく ア！？ ちかいの魔球！？

タテガミの投球フォームは、ちばてつや作 ちかいの魔

球』の主人公二宮光そのままのアンダーローのサウス

ポード。

タテガミの腕がフシユツとうなりをあげるとほとんど

同時に、キャッチャーミットがズババンと音をたてる。

あまりに速すぎて、ぼくにはボールが見えなかった。も

ちろん観客にも)

ヤスベー 負けても家来にしてもらえない人もいるけどね。
ぼく こいつ、やるかッ。
ヤスベー やりたい？
ぼく 首を振って。ウウン。
ヤスベー コウちゃん、ほんとに悪さするより考えて楽しむほうだもんね。
ぼく ……おじさんはさ、どうしていつもぼくが呼ぶとすぐに出てくるの？ オッ、そろそろコウちゃんが呼ぶころだぞ、ってわかるの？ どうして？ おじさんはぼくといないときはなにしているの？
ヤスベー コウちゃんに呼ばれるのを待ってる。
ぼく そんなんあり？
ヤスベー ただ待ってるわけでもないさ。ハモニカ吹きながら待ってたり、マンガを描いてるときもある。
ぼく マンガ家なんだ！？
ヤスベー 頭をかいて。イヤ、それほどのもんでもあるぞ。
ぼく じゃあ、消える魔球、信じてる？
ヤスベー もちろん信じてる。
ぼく ほんとに消えるやつだよ。
ヤスベー ほんとに信じてる。
ぼく ホント——ッに見えないやつだよ。

ぼく 野球ってよ、見てるほうが楽しいぜ。
タテガミ バカ！ 1、2の3でバット振ってみろ！
ぼく 見えねんだよ！
タテガミ 腕をグルグルまわし。第三球——
ぼく タテガミさア、ぼくアホのまねうまいよ。
タテガミ ピッチャー、振りかぶりました！
ふたたび 一回グルルと二二〇度回転。
見えない白球がうなりをあげてミットに——ズババン！
ぼくはとうとうバットを振ることができなかった。
生徒たち スットライイク・アウト！
ぼく タテガミさア、おまえの球、長島だつてゼツタイ打てないよな。
タテガミ 家来なんかしてやんないよ。おまえなんかいてもいなくても一緒じゃねえか！
ぼく だって、ほんとに見えねんだよ。
タテガミ 見えねえのはおまえじゃんか。おまえ、透明人間じゃんか。
生徒たち はやしたてて。じしゅん・かみなり 梶 コージ 繰り返して ……

タテガミ、生徒たちを従え揚々と去る。

ぼく　タテガミの後ろ姿に「そうやう、わてトーマーニンゲンやんねん！」　盆踊りの太鼓が空々しく響く　うるせえぞ、盆踊り！……　昔からさげた双眼鏡をのぞき　へへ　ヨキコとキューサクはあすこで出逢ったのか。おい！　ラヂオはテレビに負けたぞオ！　いいか！　タクアンだぞオ！　おい！……　悲しくなつて　おい……おじさん。盆踊りの太鼓がさ、ドドンガドン、ツラカッタ……つてなつてるぞ。ねい、おじさん！

ヤスベーが影のようにぼくの背後に立っていた。

ヤスベー　ヨキコは、行ってしまったよ。

ぼく　ウルサイ！

ヤスベー　……

ぼく　心細く　おかあさん、どこ行っちゃったの。

ヤスベー　産婦人科。

ぼく　シキ！？

ヤスベー　キューサクはさ、ヨキコに新しい子供が生まれると

思ってるんだ。

ぼく　へん。どうせぼくなんかよ、生まれてスイマセンだ。

ヤスベー　まあまあ……　ト、ピースを取り出し　一服どうだす。

ぼく　禁煙中。

ヤスベー　知らなかった。

ぼく　ま、妹もできることだしよ。

ヤスベー　そうか。ユウちゃん、妹がほしいんだ。

ぼく　ねい、いつ生まれるのかな？

ヤスベー　トツキトーカというからねえ……。

ぼく　トツキトーカ？

ヤスベー　「胎児の夢」と呼ばれる思想があったなあ。永遠とはトツキトーカの譬えかもしれない。

ぼく　ひとり台本の独白　ふうむ、十月十日に生まれるのか。

けッ、オリンピックの始まる日じやんか。メデタイやつめ。

へへ、家来にしてこきつかつてつかわす。

ヤスベー　ねい、ユウちゃん。

ぼく　なあに、おじさんちゃん。

ヤスベー　ぼくはユウちゃんの家来……だよね？

ぼく　ほんとだね、ちゃんと勝負して負けなきやだめなんだよ。

ぼく　みたいに立派に。

とにやってくるもの。それは思い出しみこむ雨。突然の雨音。ヤスベーは机の上の原稿を取り上げ、読んで おや？ 先生！？ 夕立ちですよ。……」

その五 がんばれ、国鉄スワローズ

マンガの壁が割れると、そこは母の病室。
中央に置かれたベッドでは、母のかわりにぼくが眠っている。

ベッドの脇では父が白衣の医師となにやら真剣な顔つきで話している。
下手の仕事机ではヤスベーがペンをはしらせている。
雨の音にまじって遠雷が間の抜けたようにきこえてくる。

父 空を見上げ) おや？ 先生！？ 夕立ちですよ。 卜、言うやいなやピタリと雨がやむ。 ちょっ！？ もうやんじまいやがった。……まったくひどい水不足ですねえ、先生。
ぼく 寝言で) おじさん……
父 ぼくを見て) かわいそうに、この子もせっかくの夏休み

ヤスベー だからさ、見えないからさ、信じるしかないんじゃないか。

ぼく 信じてると見えるようになるの？

ヤスベー 見えなきゃダメ？

ぼく ホームラン打ちてえよお。

ヤスベー たとえ、それがエーエンに見えないとしても、それを信じ、それを希い、それにみちびかれんとするのです。――

――なんだ？

ぼく エエ！？

ヤスベー 上に「マ」のつく。

ぼく マ……マープル・チョコ。

ヤスベー いま話していた。

ぼく マキ ユウ？

ヤスベー 第三ヒント。 ユウちゃんが大好き。

ぼく 松島トモコ！？

ヤスベー あの松島トモコ？

ぼく ちがうよ。ぼくのクラスの―― 真っ赤になっていいじゃねえかよオ。

ヤスベー 正解は――マンガでした。

ぼく わっかんねえよ。問題が失格。

ヤスベー ごめん。だから、ぼくの描いてるマンガのことさ。

ぼく フーン……

ヤスベール ぼくはさ、ユウちゃん、ぼくは、この世における正義の勝利を信じている。この地上で善人は必ず幸せになれると信じている。この手でいつか全き真理をつかむことができる。と信じている。……マンガ。そういうこと。

ぼく ねい、おじさんはどっから来たの？

ヤスベール 色んな町をあるいたさ

麓のまち 海のまち

月の街道もあるいたし

星の屋根にも身をよこたえた

沈む 広がる 泣きぬれる

この身はつねに 夜の霧

ぼく ぼくもおじさんのように旅をして、そして、いつかあの子に逢えるのかしらん。

ヤスベール 空を仰ぎ 星はなんでも知っている……つてね。

星とは、永遠という思想の故郷かもしれない。

ぼく ♪ゆめ そらの とおくの

まち ひとりであるくの

きつと ぼくをまってる だれか 知らない人が

ゆめ つきの むこうの

みち きょうも あえるね

でも だいすきなのに なぜ さみしくなるの

ヤスベールはマンガの世界を出ていこうとする。

ぼく 行かないで！

ヤスベール ありむいて……

ぼく ねい……おじさんの名前は？

ヤスベール 人さらい。

ぼく ヒトサライ……

光る稲光。少し遅れて遠雷。

マンガの壁が迫りだし、ぼくをのみこむ。

ヤスベール 我ハ汝ヲ愛ス者ナリ。……一瞬の思いが稲光となつてぼくの目をくらませたあと、少し遅れて、遠い雷鳴のよう。にことばがぼくの口からこぼれました。ゆっくりと仕事机に向かいつつそんなふうには、ことばはいつも手遅れなのです。でも、その夏、ユウちゃんたちが待ちこがれていたのは、遠い雷鳴のそのまたあとにやってくるものでした。ことばのあ

父と医師は、緩慢な動作でベッドに横になる母をことばもなくながめている。
医師、退場。いれかわりにぼくがもどってくる。

ぼく おとうさん、売店でユカコーラ買っていい？
父 ムダ使いするな。
ぼく でも、ぼくまだ飲んだことないんだよ。
父 クスリ臭くて子供に飲めるもんか。
ぼく 学校じゃみんな飲んだことあるって。
父 水でいい、水で。
母 コウちゃん……
父 ぼく 母を見て……
母 こっちおいでよ。
ぼく いいよ。
母 どうして？
ぼく なんでも。
父 コージ。ト、母の方へ「ぼく」の背中をポンと押す
ぼく 母の胸にのめりこみ ウプ……
母 おかあさん、臭い？
ぼく ウン。
母 クスリ臭いの？

だつてのにプールにもはいれないんですからねえ。
ぼく ガバと起きあがり おじさんッ！
父 コージ。おまえ、ズボンの前が出っばってるぞ。
ぼく あたりを見まわし ねえ、おじさんは？
父 はやくシヨンベンしてこい。
ぼく ハイ。ト、下手へ去りかけて、ふりかえり おとうさん。
父 なんだ。
ぼく おとうさんは正義の勝利を信じてる？
父 だれに教わったんだ、そんなこと。
ぼく やさしいおじさん。ぼくの家来。
父 いいからはやく行ってこい。
ぼく 去り際に医師に呪文をかけて アノクタラ・サントシル・ソワカ……
父 コージ！
ぼくは去る。
父 それで先生、そのお、手術のことなんですけど……
医師 こちらを見てください。ト、レントゲン写真をかざし
地球には南半球と北半球とありますね。いいですか。人間の

父 大脳の場合は、**ト**、指で示し、右半球、左半球と呼びます。
父 するつてえと、**ココ**が赤道ですね。
医師 奥さんの腫瘍はこの右半球の、**ココ**です。**ココ**が白くなっ
ているでしょ。
父 先生、これ、日本列島に似てませんか。
医師 これがどんだん成長しているわけです。
父 高度成長か。
医師 出産でいえばもう臨月間近。そのくらいの状態だと思っ
てください。
父 おかしくてたまらないふうに。うちの**コージ**のやつね、
ヨキコに新しい子供が生まれると思ってるんです。いえね、
はじめに**ヨキコ**を**二丁目**の先生んと**こ**連れてったもんですか
ら。
医師 **二丁目**の？
父 だから、**コージ**の生まれた産婦人科の――
医師 いいですか、**梶**さん、いまあなたの奥さんに残された道
はただひとつ、手術しかありません。
父 それそれ、その手術なんですけど先生、**ヨキコ**の奴あれで
以外に暗示に弱いと**こ**あってね、ですから**こ**はひとつ手術
じゃなく、催眠術じゃだめでしょうか。
医師 **ぼく**は**引田天功**ですか？

父 いやいや、実はわたしの工場の方が倒産しちゃって……。
まったく、オリンピック景気なんていつて、こつちじゃ工場
がバタバタつぶれてるんですからねえ。
医師 **梶**さん。
父 もちろん！ 入院代はなんとかします……けども、手術代
まではとてもとても……
医師 たしかに、まだ催眠術の方が**マシ**なのかもしれない。
父 ね。そうでしょ。
医師 手術で奥さんが助かる見込みはおそらく「割もないでしよ
う」。
父 「割！？」
医師 しかし、手術しなけりゃあと一カ月、長くてもオリンピック
クの始まる頃には奥さんは……
父 「割って先生、国鉄スワローズだってもっと勝ちますよ」。
医師 エ？
父 わかった。やりましょう。手術やりましょう。わたしが応
援します。
父 と医師はなにもかの気配に下手をふりむく。と、そ
こにはユカタ姿の母が青白い顔で立っていた。話はすべ
てきかれてしまったのか？

ぼく なおも勝ち誇って) ハ・ハ・ハ……

ト、笑っている間に母は運び去られ、ぼくひとり置き去りにされた。

ぼく ……おかあさん!?

ヤスベーは上手の電信柱の下に画帖を開いて立ち、ぼくの後ろ姿をスケッチしていた。
いつの間にかヤスベーの仕事机にはソバ屋の出前の女が座り、密かに原稿を調べていた。

ヤスベー ぼくに語りかけるように) ねい、コウちゃん。さみしさは、野原がよこした黄色い小さな勳章じゃないか。きみは、眠ったはずなのに電燈が消えると目が覚めてしまうよ。うな、うすむらさきの夜明けの空気のなかでは知らず知らず息をとめてしまうよ。うな、そんな種族の少年なんだ。

ぼくが彼方をふりむく。

ぼく ボソリと) ことばなんか……もういらないよ。ト、去

ぼく なんだかニワトリくさい。

母 それはね、かあさんの体の中で猫が暴れてるの。それでニワトリ殺して食べちゃった。

父 ……コージ、おまえ、先に家帰ってろ。

ぼく おとうさんは?

父 まだ先生と話あるから。

ぼく 母のユカタを指さし、父の耳に あれ、ぼくのユカタだよ。

父 声ひそめ) うん。洗濯、間にあわなくてさ。

母 アタシも二遍、飲んでみたいな、ユカコーラ。

父 あわててポケットの小銭を探り) コージ。濃いイとこ一本買っけな。

母 いいの! ……だって夢はね、カナイソーなままがいちばんいいの。

父 独白) そのうち夢が金井荘。

ぼく 独白) それじゃあ夢が川井荘。サイテー。

母 コウちゃん。手紙、ありがとね。

ぼく テガミイー!?

母 懐から大事そうに手紙を出し) おとうさんに読んでもいいかな?

ぼく 知らねえよ、そんなの。

母 読んで。ヨキコさんとやら。こどもものころ、アナタの夢はバスの車掌さん。おり物工場の女工のころは、アナタの夢は美容師さん。——」

ぼく ぼくじゃないからねッ。

母 夢はなんべんやぶれても、いつかは幸せつかまえて。アクセーシューヨーなんか負けるなよ。じしん・かみなり・梶…… 母をこすって)……」

父 オマエ、知ってたのか!?

母 見えないわ。コウちゃんの名前が。さつきはちゃんと見えたのに。……

父 先生。……先生! ㄴ、医師を呼びに去る

ぼく ぼくが書いたんじゃないからねッ!

母 ベッドから下り、手探りでぼくに近寄り) コウちゃん、どこにいるの? アナタが見えないのよ。

ぼく 恐怖にひきつりうずくまって) 許して。……許して!

父が医師と看護婦を連れてくる。

医師らは母をベッドに連れてゆく。

ぼく 医師にとびかかり) おかあさんにさわるな!

父 コージ! ㄴ、ぼくを医師からひきはなす)

ぼく おかあさんは病気なんかじゃないぞ! おかあさんは子供が生まれるんだ。ぼくの妹なんだ。病気はほくだよ。ぼく、透明人間病なんだ。彼方〇 そうだよね、おじさん。……おじさん!

ヤスベー 画帖を手に立ち上がり) アノクターラ・サントシル・ソワカ。

ぼく 巨人。ピッチャー二宮光。ふりかぶりました!

医師と看護婦は母を寝かせたベッドを運び去ろうとしていた。

ぼくは二宮光よろしくふりかぶり、見えない球を医師めがけて投げる。

空気を裂いて球の走る音。そして——ズババン!

医師、ウググッと唸り声をあげ、尻の穴をおさえてうずくまる。

看護婦、悲鳴とともに腹をかかえて身をよじる。

ぼく 勝ち誇って) ハ・ハ・ハ……

看護婦 あたったわ……

医師 昼飯のシメサバがア……

父 袖に急患ですよオ!

いいってことさ。ふつうにコココーラ飲んでさえいれればきみ
だってそのうち有名になれるかもしれない。

出前の女 コカコーラ飲んでるだけで？

ヤスベー あの宮本武蔵だつてね、もしもコココーラを飲んで
さえいれればいまよりずっと有名になれたんだ。

出前の女 どういうこと？

ヤスベー 宮本武蔵は巖流島へ行くときに竹の水筒を持って
いった。いいかい？ 水筒の中身はただの水。コココーラは
入れてかなかつたんだ。

出前の女 そりやそうや。もしコココーラを入れてつたとしたつ
て途中の船なかでヌルなつてしまうもんな。

ヤスベー もしもヌルなつたコココーラを持つて巖流島へ向
かったら、宮本武蔵は佐々木小次郎との決闘よりも、命を賭
けた勝負の前にヌルいコココーラを飲まなければならなかつ
た男として、いまよりずっと有名になれたんだ。

出前の女 あきれて あんなあ……

ヤスベー そういうもんな。

出前の女 先生さ、ヌルなつたコココーラ飲まされる側の気持
ちになつたことある？ ないやろ？

ヤスベー でも、飲まなかつたんだよ、宮本武蔵は。

出前の女 もし飲んでたらつて想像するだけで充分ひどいわ。

らんとす)

ヤスベー コウちゃん……

ぼくはいま一度彼方をふりむき、そして、ゆつくりとマ
ンガのなかに消え去る。

その六 原寸大のコカコーラ

ヤスベーの仕事部屋。

疲れ切つた足どりで仕事机にもどるヤスベー。ところが、
そこにはソバ屋の出前の女が座つていた。

出前の女は、松島によく似ている。

出前の女 ヤスベーを見てニヤリと つづきはどんなんねん？

ヤスベー さとばもなく……

出前の女 原稿をもどし ヤスベー先生……やろ？ 壺ち
上がり) ハイ、これ、プレゼント。

ト、高層ビルのようにソバの積まれた盆をドーンとヤス

ベーに渡す。
ヤスベーは、あまりの重さによろけ、その拍子にくずれ
そうになったソバを建てなおそうと盆を持って舞台を右
往左往する。まるで盆踊りだ。

出前の女 そのかわり質問してもええ？ 心配せんといて。簡
単な質問やから。――

ヤスベーはやつのことで盆を床に置いた。

出前の女は、取材記者気取りにノートと鉛筆を持ち――

出前の女 あんたにとってコココーラとはなんや？

ヤスベー ドキッとして。え！？

出前の女 たとえばやな、もしあのときあのコココーラを飲ん
でいればって、そんな思い出ない？

ヤスベー ……

出前の女 じゃあ、あんたがいまいちばんコココーラを飲ませ
てみたいと思う人は？

ヤスベー ……

出前の女 次。あんたが初めてコココーラを飲んだのは何歳の
とき？ もしおぼえとったら、初体験の感想もきかせて。

ヤスベー ついに爆発して。どうしてぼくがきみにそんなこ
と話さなくちゃいけないんだ！

出前の女 あたしもな、先生みたいにコココーラが出てくるマ
ンガ描こう思て。

ヤスベー だったらひとにきかずに勝手に自分で描けばいいじゃ
ないか。

出前の女 先生はマンガ描くとき取材ってせえへんの？

ヤスベー だれがどうやって描いたって同じなんだ、マンガな
んか。どう頑張って描いたって、どうせ同じワンパターンの
愛と勇気と友情の繰り返しなんだ。どうせいつかどっかで読
んだようなものしか描けやしないんだよ。

出前の女 先生！？ ……マンガ嫌いなのか？

ヤスベー ……

出前の女 あたしはさ、そんなことどうでもええねん。あたし
は有名に

なりたいねん。それだけ。

ヤスベー いくらだって有名になれるさ。マンガさえ描かなけ
りやね。

出前の女 マンガはもうあかんって、先生そう思てるん！？

ヤスベー ぼくのいいたいのはね、コココーラのでてくるマン
ガなんか描くより、ふつうにコココーラ飲んでた方がずっと

ワー ワッ ワタシ
からだ プカプカ ロマンティック

シユバ シユバ

ワン ツウ さあ踊ろ
夢のなかなら なんでもオーライ

朝まで さあ踊ろ

男 わたし ほんまに イカすやないけ

ワー ワッ ワタシ

好きよ 大好き 夢のダンス

シユバ シユバ

ワン ツウ いつまでも

夢のなかで hold me tight

朝まで 抱きしめて

ヌルなったコココーラやなんて……

ヤスベー そんなにまずいの？

出前の女 飲んだことないんや！？ つづく ええなあ…

…

ヤスベー だいたいコココーラつてのを飲んだことがないんだ。

だから、こうしてこんなマンガ描いてるわけさ。

出前の女 エエ！？

ヤスベー ぼくね、ときどき自分のまわりのいろんなものが原寸大の模型に見えるんだ。たとえば 机の上のコーラ壺を手に このコココーラにしても、原寸大のコココーラの模型に見えるちゃう。そうすると、ぼくはもうこれを飲む必要がないのだから、ただ眺めているだけでとても満足できちゃうのさ。

出前の女 カワイソーねえ……」

ヤスベー そんなこともないけど。

出前の女 あたしがカワイソーっていったのは……死んでゆく人。先生のマンガのなかで。

ヤスベー え？

出前の女 なあ、先生。これがあたしの最後の質問。真剣に

今度ほだれが死ぬの？ 梶くんのおかあさんの次はだれの

番？」

ヤスベー コウちゃんのおかあさんはまだ死んじやないさ。
出前の女 ごまかさんという！ ㄴ、乱暴にヤスベーから画
帖を奪い、そこに描かれたスケッチを見て「これは！？：
…そうやったん？ そういうことやったん？ さめざめ泣
き」カワイソー……
ヤスベー 画帖を奪いかえし、スケッチを見て「ああ、松島
トモコか。
出前の女 なんで先生？ まだこんなにかわいいのに。なあ、
なんで殺してもうたん！
ヤスベー ぼくが殺したわけじゃないさ。
出前の女 だって、これ描いてるの、先生やろ。
ヤスベー だから、いったじやないか。自分で描こうと思って
描けることなんて、ほんのちよっとなんだ。ぼくのはこのこ
となんて……終わってしまった物語を何度も何度も繰り返し
描き移す。まるでだれかの日記を書き写すみたいだね。
出前の女 じゃあこれはだれの日記？ なあ、だれの日記なん？
ヤスベー ニジッセイキ。
出前の女 「ニジッセイキ？」…… 出前の女はおもむろに下
手へ去らんとす
ヤスベー きみ！
出前の女 ありかえり！ お酒あるやろ？ んなの、悲しいて

飲まなやつてられへんわ。なあ、先生。今夜はパツとやろう
や、パツと！
ヤスベー 原稿に書いて「パツとやりましょうよ、パツと！」
出前の女、退場 夏休みも終わり、いよいよ今日から新学
期……「アゴをあげ、彼方を見て」それではここで、恒例
の「ミス夏休み」の発表です！

その七 転校生、登場！

マンガが割れると、そこは夏休みがあげたぼくの教室。
生徒たちの歓声と拍手に迎えられ、松島登場。
ヤスベー、クチナシの花を挿した一輪さしを松島の机の
上に置く。
マンガの世界からまろびだしたぼくが生徒たちとともに
歌う。
ヤスベーはその様子を画帖にスケッチする。

♪ ワー ワツ ワタシ
こころ フワフワ 夢のダンス

これひとえにコカコーラのおかげなのであります。

藤山教諭 コカコーラがどうしたんだ？

もう一人のぼく もしもぼくがあの日あそこで、あの一本のコカコーラを買っていなかったとしたら…… 思い入れの間

……よしませう。思い出は無理にむきとらないほうがいいのです。玉ネギをむくようにどこまでむいてもきりがなく、涙ばかりが出て、泣きやんだころには玉ネギはきつとどこかへいつてしまおうでしょう。

藤山教諭 もらい泣きして。では、梶くん、きみの席はあす

こだ。 ㊦、松島の席を示す。白いクチナシの花が痛々しい

もう一人のぼく 藤山教諭にもらい泣きして 先生、どうし

てぼくの席にはクチナシの花が咲いているのですか。

藤山教諭 それは梶くん、死人にクチナシだ。シャレじゃないぞ。

の膝の上) もう一人のぼくは涙ながらに自分の席 すなわち、松島

に座る。ぼくの眼前に大きな壁がたちだかる。つまり、
ぼくの席は松島の席のすぐ後ろだったのだ。

ぼく 手を上げ) 先生！ 前が見えません。……

男) わたし ほんまに イケズやないけ

ワー ワツ ワタシ

踊りつづける 夢のダンス

ヤスベー スケッチの手をとめ) 発表します！ 今年の夏休

みの栄えある犠牲者には選ばれたのは——町はずれのジャブジャ

ブ池で見事溺れ死んだ女子の学級委員、松島トモコさん！

ぼく 松島！？

松島 ぼくをふりむき) 梶くん。大事にするからね、これ。

㊦、胸を示す)

ぼく なんだよ！？

松島 梶くんくれたバッヂ。コカコーラの王冠の。

ぼく 知らねえよ、そんなの。

ヤスベー きつとあの子だよ。

ぼく え？

ヤスベー あの山のずっとずっと向こうには、緑の野と、小鳥

と、そして——

ぼく もう一人のぼく！？

ヤスベー 校庭のユーカーリの陰に立っていた見知らぬ顔のふる

えるまつげ。紹介しよう！ 転校生の、じしん！ かみなり！

梶コージくんだ！

西郷輝彦『君だけを』の前奏にのって、ぼくによく似たもう一人のぼくがスポットライトに浮かびあがる。ぼくとまったく同じ衣装を身につけたもう一人のぼくを演じる役者は、クローンかと思まごうほどぼくにウリ二つであるか、突然変異かと目をそむけたくなるほどぼくに似ても似つかないかのどちらかであるべきだ。同姓同名の転校生であるもう一人のぼくは、『君だけを』をぼくのために歌う。

♪ いつでも いつでも 君だけを
夢に見ている ぼくなのさ

もう一人のぼく よろしゅうたのんます。
生徒たち ア！？ 大阪弁！？
もう一人のぼく なんでやねん！

登場。 歌が終わると同時に始業の鐘が鳴り、担任の藤山教諭が

ヤスベーは消えていた。

タテガミ 起立ッ！ 礼ッ！ 着席ッ！

一同、着席。死人の松島も自分の席に座る。

もう一人のぼくは黒板の前に藤山教諭と並んで立つ。

藤山教諭は黒板に大きな字で「梶コージ」ともう一人のぼくの名前を書く。

藤山教諭のセリフの間に、もう一人のぼくは生徒たちの一人一人にユカコーラの王冠でつくったバッヂを配ってまわる。

藤山教諭 梶コージくんはだね、あの山のずっとずっと向こう、そのまたずっとずっと向こうの遠い町からやってきました。というのも、梶くんはおかあさんを悪性腫瘍で亡くし、おとうさんも働いていた工場が倒産——シヤレじゃないぞ。してから、自分で小さな小さなこんな小さな事業を起こしたのがこれも失敗、とうとう人間蒸発してしまって梶くんはひとりぼっちになりました。——梶くん。キミ、なにしてるんだ。もう一人のぼく、藤山教諭にも マ、マ先生もおひとつ。藤山教諭 受け取り。こおら、ユカコーラ！？
もう一人のぼく ハイハイ。わたくし梶コージの今日あるのも、

き) 以後、末長く、愛シテネ。
タテガミ 気持ち悪い気持ち悪い……ト、身体をひきはなし
こいつ、女なんだってよ。ト、家来の生徒たちとともにバカ
笑いする。
もう一人のぼく (一緒に笑って) こんな女どこにもおらへん
て。

ト、いったものの、こみあげてくる涙を見られまいとす
るかのよう教室から駆け去る。

タテガミ おい！ 逃げるのかよ！

藤山教諭 タテガミ。いいじゃないか。

タテガミ でも……

藤山教諭 えー、今日から梶くんは女子の学級委員になりまし
た。

タテガミ あわてふためき) 先生!?

藤山教諭 なんだ?

タテガミ おれたち……だから、冗談じゃんかよ。

藤山教諭 なにか?

タテガミ だって、あいつ男だぜ。

藤山教諭 タテガミ! ……いいじゃないか。

藤山教諭 みなさんも知っているとありますが、松島トモコさん
は、池で溺れ死んで、あの山のずとずと向こう——梶く
ん、なにか言った?
ぼく 立ち上がり) 先生の顔がぜんぜん——
もう一人のぼく (ことばをとって) 藤山寛美です。
藤山教諭 藤山寛美のモノマネを——って、梶くん、なに
やらすんだ。

教室中がドツと笑いにつつまれる。が、ぼくにはなにが
なんだかわからない。藤山寛美を知らなかったのだ。

藤山教諭 先生、なに話しようとしたのか忘れてしまった
じゃないか。……そうだそう。えー、亡くなった松島トモ
コさんのかわりにいまから女子の学級委員を選びたいと思ひ
ます。先生、紙配るし。名前一人だけ書くんだぞ。……

ト、紙を配る。

タテガミは家来の生徒たちを集めて円陣を組み、なにや
ら悪巧み。

藤山教諭 みんな、書いたか? ……集めるぞ。

ト、投票用紙を集めてまわる。
松島も自分の投票用紙を手渡そうとするが、受け取ってはもらえない。松島がそこにいることを知っているのはぼくだけなのだ。松島は仕方なく、藤山教諭のズボンのポケットにそっと投票用紙をしのばせる。

藤山教諭 集め終わった投票用紙を手に黒板の前に立ちよっしゃ。じゃあ、発表だ。——学級委員タテガミ。読んだって。タテガミ ハイハイ。先生。ト、揉み手ですすみでて投票用紙を受け取る。藤山教諭はチヨークを持ち黒板を向く。みんな、わかっているよな。いまから選ばれた奴はおれの女房になるんだぜ。ト、一人で喜んでゲへへ……

藤山教諭 はやくしてくれよ。
タテガミ ニヤリと投票用紙を開き、読み上げようとして蒼白となつて……
藤山教諭 どうした？
タテガミ 読んで 松島トモコ……

教室に冷たい風が吹き抜ける。

ぼく 照れてだつてよ、やっぱ松島しか考えらんねえよ。
藤山教諭 それは、無効だな。松島トモコさんはもうここにはいないんだ。
ぼく いるじゃん、ここに！？ ト、自分の前の席を示す
松島 梶くん。いいの。みんなにはわたしは見えないの。
もう一人のぼく ぼくをふりかえり、ニコッとオス。
ぼく ……

藤山教諭 タテガミ。はやく次、読んでくれ。
タテガミ 投票用紙を開き、今度こそニヤリとして 梶コージ。
ぼく 立ち上がり)なんだよ、タテガミ。
藤山教諭 梶コージくん。一票。ト、黒板に書く
ぼく ええエ！？
タテガミ 次から次と投票用紙を開き、次。梶コージ。これも。梶コージ。梶コージ。梶コージ……カジユジカジユジ……梶コージ！ 黒板が票数の「正」の字で埋まった)先生。多数決の結果、梶コージくんがぼくの女房になりました！
ぼく きたねえよ、おまえら。ト、抗議するが、だれにも問題にされない
もう一人のぼく 憤然と席を立つとタテガミに歩み寄り、なにをいうかと思えば)ふつつか者ではございませうが 抱きつ

もう一人のぼく タテガミくん。きみの負けや！

ト、さらにバケツからレギ ユラー・サイズを二本取りだし、両手に持った二本のコーラ壺を構える。それはまるで宮本武蔵。

生徒たち ア！？ 二刀流ッ！？

タテガミ おまえ、宮本タケゾーのつもり？

もう一人のぼく 宮本タケゾーは大人になってムサシになって、そして、戦争でバラバラになった大人のココロをひとつにするため、苦勞して近代オリンピックピックを始めたんや。

タテガミ オリンピックウ？

もう一人のぼく その様子を後世に書きのこしたのが、宮本武蔵の五輪の書です。知らなかったろ。タテガミくん。

タテガミ ウーム。

もう一人のぼく そして、ユカコーラは、そのオリンピックの公式清涼 飲料なんや。

タテガミ なんでもいいから、勝負だ！

生徒たち セーノオ——

決闘が始まる。

タテガミ なにがええねん！？

生徒たち ア！？ 大阪弁！？

タテガミ ウルサイ！

藤山教諭 なあ、タテガミ。民主主義に絶望したらだめだ。たとい結果がどうあるうと、梶くんは民选的に選ばれたみなさんの学級委員じゃないか。ズボンのポケットに隠した手を出す。その手には松島の投票用紙が握られていた。ン？ こんなところにもう一枚……？ ト、開いて読んだとたん急に真顔になり、投票用紙を握りつぶすと床に投げ捨てた。だれだ、これ投票したのは？

藤山教諭は静まりかえった教室を見まわす。

松島がそっと手をあげる。が、もちろん藤山教諭には見えない。

ぼくは捨てられた投票用紙を拾い、開いて読んで——

ぼく さよなら、ニジッセイキ…… ぼくは黒板に駆け寄る

藤山教諭 さあ、手上げる。だれがこれ書いたんだ。……さ

あ、だれが手上げるんだ。見えないぞ。先生には見えないぞ！

ぼく 黒板に大書して「さよなら、ニジッセイキ」に一票！

終業の鐘がきこえてくる。

タテガミ 起立ッ！ 礼ッ！ 藤山教諭（退場）

藤山教諭は悲しそうに上手に去る。

いれかわりに、バケツをさげた用務員さんが鐘を鳴らしながら登場。それがもう一人のぼくの変装であることはだれの目にも一目瞭然である。

もう一人のぼく ガチョーン！ 梶だア。

タテガミ 無視しきって家来たちに おい、帰るぞ。ト、去ろうとしてもう一人のぼくに 授業中に勝手に教室出るなんてよ、おまえそれでも学級委員？

もう一人のぼく ちよつとな、校長室へ就任のアイサツ行ってきたん。えー、みなさん。ぼくな、学級委員としてな、今日から放課後一時間だけ用務員さんのアルバイトをすることになりました。

タテガミ チェッ！？

もう一人のぼく もちろん、みんなのためや。タテガミ だれもたのんでねえよ。

もう一人のぼく でも、そのかわりに、校長先生がな、秋の運動会の公式飲料として ト、バケツから取りだした コカコーラの壇を掲げ コカコーラを認めてくれたんや！
生徒たち 驚き、呆然と やったア！？

もう一人のぼくは、おいしそうにコカコーラを一気飲みする。

もう一人のぼく プハー！

生徒1 じゃさ、学校にコーラ持ってきてもいいの！？

もう一人のぼく 壇を示し もう持ってきてるやん。

生徒2 学校でコーラ飲んでもいいんだ！？

もう一人のぼく 飲んでるやん。

生徒たち やったア！ ト、歓声を上げる

タテガミ おれは認めないぜ。もし認めてほしきやおれと勝負しろ、梶！

ト、自分のカバンからなんとホームサイズのコカコーラを二本取りだし、一本をもう一人のぼくにつきつける。
もう一人のぼくは、それを受け取ると不敵に笑い――

ぼくたちの背後に追憶の幕（紗幕）がおりる。

その八 淋しい星

原っぱ。（紗幕前）

二人のぼく、そしてこの世のものならぬ松島は、スマイレ色に暮れてゆく空をながめている。

下手の机でも、ヤスベーが仕事の手をとめ彼方を見上げている。

ぼく 天を指さし あ！？ 一番星。

松島 なんだか、淋しそうなお星様ね。

ヤスベー あれは、地球です。いまぼくたちがお話を交わしているところの遊星なのです。

もう一人のぼく 双眼鏡持ってくればよかったなあ。アメリカが見えたかもしれへん。

ぼく うん。デズニールランドもね。

二人のぼくは互いに互いを見つめあう。

もう一人のぼくは一気飲みでレギ ユーサイズを空にする。

生徒たち 梶くん、一本クリアー！ 二本目！

勝負は圧倒的にもう一人のぼくの優勢のうちにすすむ。

生徒たちは歓声をあげ、はやしたてる。

ヤスベー、いつからか教室の片隅で影のように机にもたれ、画帖にスケッチをしていた。

ぼくは生徒たちの輪にはいることもできず、ふと松島をふりかえる。

ヤスベー 画帖から顔を上げ、松島はまだそこに座っていた。

した。そこは、夏休みのはじまる前まではたしかに松島の席だったのです。でも、いまは……

ぼく 松島？

松島 梶くん、おぼえてる？ わたしたち、一年生からずっと同じクラスなのに、口をきいたのはたった一度きりだったわ。

ぼく 去年の秋だろ。

松島 うちの庭の柿の木の下で、ね、わたし落ち葉を集めてたき火しようとしたの。

ぼく おまえ、こわそうにマッチすってんだもん。そんなに長い指のくせにさ。おかしくって、ぼく……気にいっちゃったぜ。

松島 わたしが気がついたら、梶くん、言ったのよね。

ぼく あの……柿をとらせてください

松島 はい。……どうぞ

ぼく あれだけだったな。

松島 一度きりだったわ。

ぼく おまえ、いまでもあんなふうにマッチするの？

松島 シュッ！ とマッチをするでしょ。そのときだけポツ！

と夜が明るくなるの。そのときだけでいいから、わたしのこ
と、思い出してね。梶くん。

ふたたび生徒たちの歓声――

生徒たち 梶くんの勝ちイッ！

もう一人のぼくは見事に二本のコーラ壺を空にしていた。
タテガミはまだ二本の三分の一を残しているのに、であ
る。

タテガミ 梶。おまえ、野球できる？

もう一人のぼく え？

タテガミ おれのチームに入れよ。

もう一人のぼく でも、ええの。ぼく、四番でサードしかでき

へんで。

タテガミ よし！ みんな、行こうぜ！

生徒たち オオウッ！

タテガミはもう一人のぼくと肩を組み、生徒たちとともに退場。

ひとりですくすくまると、傍らでじっとそれを見守る

松島。

ヤスベーは、マンガの世界を抜けだし仕事机にもどった。

ぼくが何気なく上手をふりかえると、消えたはずのもう

一人のぼくが袖からジッとぼくを見つめていた。

もう一人のぼくはぼくに歩み寄り、ニヤリと笑う。

ヤスベー もうひとりのぼくはニヤリと笑うと、黙ってぼくを見つめていました。……オリンピックまであと四十日。放課後の教室にはまだ名残りを惜しむような蝉の声があふれて……でも、コウちゃんの夏はとっくに終わっていたのです。

にはもちろん松島の姿は見えない。

松島の父 ぼくに トモコのお友達ですか。

ぼく ……

もう一人のぼく ぼくにかわってア、はい。死んでからですけど。

松島の父 一緒にいらっしやいませんか。あなたただけなんですよ、子供で来てくれたのは。

もう一人のぼく 松島さんて、全然友達おらんのですか!?

松島の父 トモコは体が弱くてね、しょっちゅう風邪ばかりひいてたんです。だから、いつも部屋のなかでひとり遊んで

ました、ハイ。

松島 一度でいいからカンけり、したかったなあ。

ぼく すりやよかったじゃん。

松島 だって、おとうさん、表で遊んじゃダメだって。

ぼく そうやって大人はいつも子供の邪魔をするんだよな。

松島の父 ぼくに は?

もう一人のぼく もちろん、子供がしたくないことをしている

ときは別やけどな。

松島 いやいやなにかをしていると、大人は死ぬまで同じことをさせようとするのよね。

もう一人のぼく 驚いてもうた。きみ、ぼくにソックリなんやもん。

ぼく やだな。ぼく、ひとから見たらきみみたいに見えるのかな。

もう一人のぼく そういうもんや。

ぼく ねえ、きみだよな。田手上に挑戦状出したのも。おかあさんに手紙書いたのも。

もう一人のぼく 笑って答えず。ぼくはな、背が高いうえにスマートで、髪はしなやかなうえにブロンドやろ?

ぼく ええ!?

もう一人のぼく たとえばやって。

ぼく たとえばですか。

もう一人のぼく それでさ、スポーツなんでもこいやし、いつも学級委員には選ばれるし、成績はオール五やし、放課後は

用務員さんやろ?

ぼく 歌もうまいじゃん。

もう一人のぼく アア、西郷輝彦な。今度校長先生にたのまれまして、生徒総会で『羽座敷小唄』歌うんです。…ぼく、

自信家ですか?

ぼく そうですねえ。

もう一人のぼく でも、ほんまはみんなが思うほどぼくには自信なんかないねん。

ぼく やめてくださいよ。

もう一人のぼく、ときどきなんかわからんものが怖くなんねん。

松島 星を見つづけていて、ほんとに淋しそうなお星様。

もう一人のぼくは松島を見る。

ヤスベー 淋しくなんかないさ。あのちっぽけな遊星だって

きつといつか、救われなはずはないのだから。

ぼく もう一人のぼくに、見えるんだね、きみにも。……松

島のこと。

もう一人のぼく うん。

松島 あたし、そろそろ行かなくっちゃ。

紗幕の裏を大人たちに担がれたちっぽけな柩が通る。

三人はその葬列をふりかえり、だまってながめる。

ヤスベー 松島トモコのちっぽけな柩は、彼女がとうとう一度

も遊ぶことのなかった原っぱを横切り、待ちかまえている霊

柩車へと運ばれてゆきました。それは、その夏きいたどのラ

ジオ番組よりもおもしろく、どの映画よりも胸踊る見世物でした。その原っぱ全部をオモチャみたいに家に持って帰って遊びたい。コウちゃんはそう思いました。そこにあつたもの全部を、原っぱの形をした緑色の箱のなかに実物そっくりに配置して、ボール紙でつくった大人の肩にマツチ箱の柩をのせ、そのなかには、松島トモコのかわりにグリコのおまけのお人形さんでもいれてやろう。

ぼく 松島、行くな！

松島 わたしね、自分が肺炎で死ぬんじゃないかと思っていたの。それだけは絶対いやだって思っていたの。

もう一人のぼく、じゃあ、よかったな、池で溺れて。

松島 肺炎で死ぬのはきつと部屋にだれもいないときなんだって、そう思っていたの。助けてって叫んでもだれもいなくて、

だれかが来たときにはもう死んでるの。だからわたし、もし

自分が肺炎になったら、だれでもいいからわたしの指と指ど

うしを長い糸で結んでおこう。そうすれば、わたしが死にそ

うになったとき糸を引けば、部屋にいらなくてもどってきて

くれる。糸と糸で結ばれていれば、ひとりで死ななくてすむ。

そう思ったの。

上手から喪章の男、登場。松島トモコの父だ。松島の父

ぼくは、ゆつくりと糸をたぐる。すると!? 柩の蓋が
うすく開き、なから長く細い指に糸をまきつかせた白
い手が現れ、ぼくにサヨナラする。

ヤスベー あんなに長い指で、松島は怖そうにマッチをすって
いたっけなあ。……涙は、うすむらさきに暮れてゆくあたり
の景色をにじませ、去年の秋にすったマッチほどのあたたか
さで、つめたい少年の胸にしみてひろがりました。

プツンと糸が切れ、柩の蓋が閉る。

柩をかついで、葬列は上手に消える。

ぼく 土手に 松島トモ行くゼーッ、オウッ!

ぼくは柩を追って駆けだす。

いれかわりに、上手からムジナ出版の田手上がハンカチ
で手をふきながらやってくる。

その九 終末嗜好症

ぼく おまえはさ、死ぬまでなにさせられてたの？

松島の父 トモコは学級委員してたんですよ。なにもできな
い学級委員ですまなかったですね。

もう一人のぼく いいんですよ、だれも期待してませんでした
から。

松島の父 はあ？

もう一人のぼく 松島さんの場合もどうせタガミが冗談で選
んだんでしようねえ。

松島の父 トモコは冗談で選ばれたんですか。

松島 それでも、わたしはうれしかったわ。

松島の父 ギョッとしてあたりを見まわし……きこえませ
んでしたか!?

もう一人のぼく え？

松島の父 いまトモコの声がかきこえたんです! わたしはうれ
しかったわ……って。

ぼく 怒りで顔を真っ赤にして、うれしいわけないじゃない
かッ! カンけりも手つなぎ鬼も水雷艦長もなんにもしたこ
となくてさ、肺炎だけは絶対にいやだなんていって、でも、

肺炎ていうのは肺のなかに水がゆつくりたまわって溺れちゃう
んじゃないか。自分のなかで溺れるかわりに、松島は池で溺
れちゃって、助けてっていてもだれもいなくて、だれかが

来たときにはもう死んでたんじゃないか。そのどこがうれしんだッ！ 松島が、名残りを惜しむように手をふり上手に消える。——松島！？ 行くなッ！

ト、後を追おうとする。その行く手に柩を担いだ大人たちが現れ、ぼくの前に立ちふさがる。

松島の父 一緒に来てくれますね。

ぼく……ぼく、いいです。

松島の父 声をあげて号泣し……

もう一人のぼく それじゃあ、まあ、私が代表して。

松島の父 ありがとうございます。

もう一人のぼく 松島の父の肩をポンポンたたき おとうさんもそんなに気をおとさず。パーツといきましょう、パーツと。葬列にさあ、行くぞ！ 出発！ ローレンローレンローレン……

ト、勝手に一人去る。

松島の父 もう一人のぼくの後ろ姿に 元気でいいですねえ…… ぼくをふりかえり そのうち家に遊びにきてくれませ

んか。二丁目のなんでも屋です。

ぼく 知ってます。

松島の父 今度コココーラはじめたんですよ。飲みたかったらいつでもどうぞ。

ぼく コカコーラ？

ヤスベー そのコココーラが忘れられない思い出のコココーラになることなど、知るはずありませんでした。……コウちゃんには永遠について考えていました。永遠というのはどれくらい永いのだろう。少なくとも次のクリスマスよりは永いにちがいない。そんなことをです。だって、松島は永遠にいつてしまうのですから。

ぼくは松島の父にうながされ、柩に最後の別れをした。

松島の父は葬列を先導して上手に去らんとする。

ぼくは、ふと指にからみつけた糸に気づく。ピンと張ると、糸の先は柩のなかへ消えていた。

ぼく 待ってください！

大人たちは立ちどまり、ぼくを不思議そうにふりかえる。大人には糸は見えないのだ。

田手上 そういや先生、いつも終わりから描きはじめるですもんね、マンガ。

出前の女2 描きたいのは終わりだけで、途中は全部でっちゃんね。

田手上 いいすぎだつての。

出前の女2 ひきなりワアッと泣きだし。でもあたしはね、それじゃあんまし死んでく人間がカワイソーだつて言うんですよ。ト、立ち上がり。ええ？ 先生。そりゃ松島の場合ね、あれはやく死んでよかつたなつて思うの。だつて、あの顔で小学生はつらいわよ。ト、ヤスベーに近寄り。でも、コウちゃんのおかあさんは—— 原稿をのぞき。やややっばし殺しちまいやがつたッ！？ どうしてだよ。どうしてコウちゃんのおかあさん、殺してしまうんだ。ええ？ ちよつとくらい鼻の穴大きいからつて殺すことはないだろ。ト、つかみかかる。

田手上 ほがいにじめにひきはなし。これはマンガよ、マンガ……

出前の女2 はなせ、このヤロー！ ト、手をふりはらい、上手へ去らんとす。

田手上 オイ！

出前の女2 怖い顔でふりかえり。酒買ってくる。

ヤスベーの仕事部屋。

ヤスベーはペンを握ったまま、もの思いにしずんでいる。トイレからもどつたらしい田手上が——

田手上 イヤー、ウンコの切れが悪くつて…… ヤスベーの机の脇のソバを発見し。あれ！？ 来てるじゃない、ソバ。先生先生、食いませう、ソバ。ト、ソバを取ろうとしてヤスベーのコート姿に気づき。……先生、その格好は？ どつか出かけるですか？

ヤスベー 独り言のように。松島はあれでよかつたんだろうか。……

田手上 マツシマ？

ヤスベー ねえ、田手上くん。もしかしたら、ぼくさ、ほんとはマンガのこと——

下手から一升瓶と茶わんを持った出前の女、すっかりできあがつて鼻唄まじりに登場。

出前の女は、さきほどまでと同じ出前の女でありながら、まったく別人のもう一人の出前の女、すなわち出前の女2である。

出前の女2はぼくの母によく似ている。

田手上 先生、お友達ですか？

ヤスベー だから、ホラ、ソバ屋さんだよ……って、ええ！？

ト、まじまじ出前の女2の顔を見て きみ、さっきのソバ屋さん？ 人がかわったね、ずいぶん。

出前の女2 思いつきし泣いたらお化粧全部おちちゃった。鼻(かけ)先生。素顔で、ごめんなさい。 田手上に気づき)あら、こちらは？

ヤスベー 編集者の人さ。ヤスベーは仕事にもどる

出前の女2 臭い息で田手上に耳打ちして)ここだけの話

あたしね、こちらの先生のマンガ全部読んでる。急に大声でほんとよ、ほんと。急に声ひそめ)でも、ひとにいつちやダメ。そんなこと知られたら変人扱いでソバ屋くびだもん。わかる？ あんた。いまだきマンガ読んでるってことはね、それくらいの危険な冒険なんだ。ト、茶わんをさしだし)ま、一杯。

田手上 こりやどうも。ト、出前の女2と二人して床にあぐらをかく)

出前の女2 酒を注ぎながら)で、あんた。ながいの？ 編集者って。

田手上 イヤー……ト、酒を二気に飲みほす)

出前の女2 すぐに二杯目を注ぎながら)よかったよねえ、昔はマンガも。なんにも考えないでバカやってさ。

田手上 イヤー……ト、ふたたび二気飲み)

出前の女2 (二杯目を注ぎながら)ま、結局、ベルリンの壁の崩壊ね。あれからよ、あれから。あたしはこういつてんだけど、壁と二緒にマンガも終わったんだって。

田手上 (二杯目を飲みほしたとたん、いきなり豹変し)勝手に終わりにすんなッ！

出前の女2 (二遍に酔いもさめ、林家三平の)ドーモすいません。

田手上 ムッパ飲みに一升瓶を飲みほし)じゃあ、いまこいでマンガ描いてるあのお方はなんなんだ！

ヤスベー 手をやすめ)終末嗜好症……とでもいうのかな。子供の頃さ、引越す家がすぐくうらやましかったなあ。垣根の外からのぞいてると、家がどんかたずけられて、最後にはなにもない静かな一刻がやってくるんだ。たとえば、白い雲が群がる夏休みも、それが始まるうとする一学期の最後の日の素晴らしさには到底およばない。そんなことなかった？ ぼくさ、そうやっていつも、なにかの終わりを待っていたのかもしれない。

さん、好きなんだってな、こういうの。ガツポガツポだぜ。
なあ、ユージ。

ぼく、どこで買った、これ？

父 バカ。買ったんじゃない。おとうさんが貯金はたいてつく
らしたんだ。デザインもおとうさんだ。この舞子さんのモデ
ルはおかあさんだ。売れるぜ、こいつは。手術代の心配なん
かして損しちゃまった。ねえ、先生。

医師 梶さん。そろそろ時間ですから。

父 ……そうですか。母に) なあヨキコ、おまえ、一九五〇年
で覚えてるか？

母 ええ。あたしたちがああの盆踊りで出逢った年でしょ？

父 バカ。国鉄スワローズができた年だ。それ以来ずつと応
援してんだからよ、そろそろいい夢見さしてほしいよな。

看護婦 行きましょ、梶さん。ト、母を寝かせ医師とともにベッ
ドを押して下手ト)

父 大丈夫。今年はきつと国鉄優勝するからよ。

もう一人のぼく 母にエールをおくって) ローレンローレン
ローレン……

母は連れ去られた。

ぼくは「一刻もはやくその場を立ち去りたい思いで一杯だっ
た。

ト、上手に去る。

田手上 オーイ。この時間だと駅の向こうのローソンだぞ！

ヤスベー 田手上くん……

田手上 ヤスベーをふりかえり) ……？

ヤスベー きみ、飲んだことある？ ヌルくなったコココーラつ
て……

田手上 懇願して先生。これ以上私に飲ませんでください。

ヤスベー コカコーラ飲んで悲しくなったことは？

田手上 そりゃまあ、彼女にふられたときとかなら悲しくもな
るけど、でも、そんなときはミルクセーキ飲んで悲しくな
るしな。

ヤスベー 悲しいのはコココーラのせいじゃなかったの？

田手上 こだわりますね、コココーラに。あれじゃだめです？

ドクターペッパーじゃ。

ヤスベー ……もういいんだ。ト、ふたたびペンを執る)

田手上 まだやるですか？ 仕事。

ヤスベー あと一ト月で終わるから。

田手上 一ト月！？ ……原稿をのぞき、読んで) オリンピッ
クまであと三十日) なあ。

五輪首頭とともに追憶の幕が開く。 紗幕がとぶ

その十 正義の勝利

母の病室。

中央のベッドに母。

ベッドの上手に二人のぼく。下手では父が医師となにやら話している。ベッドの後ろには看護婦が待機している。

上手袖寄りにポツンと乳母車。布がかぶせられ、木の枝が二本立っている。

仕事机では、ペンをはしらせるヤスベート、それを見まもる田手上。

母 あら？ いい匂い。香水？ …… もう一人のぼくが照れくさそうに母に近寄る。目の見えない母は手探りにもう一人のぼくの手を握り、ユウちゃん。あなた、体になにつけてるの？
もう一人のぼく ヘリオトロープです。

母 手をはなし) どなた？ ヘリオさん？

もう一人のぼく いえ、ヘリオトロープです。

母 父に) あなた！ ヘリオさんがロープ持ってきたわよ！
父 バカ。こちらはおまえ、コージの友人の梶コージくんだ。

次にぼくの手を母に握らせ) こちらはわが家の梶コージくん。さらに足元のダンボールを) そいからこちらが、灰皿だ。

母 なんですか？ 灰皿って。

父 おまえ、煙草吸いたくないか。

医師 わさめて) 梶さん。手術の前ですから。

父 でも先生、最後の二服っていうでしょ。

医師 バカいうんじゃない。

父 じゃ、形だけ。ト、見えない煙草を母の指にはさんでやりほら、吸ってみな。

母 見えない煙をプウと吹いて) おいしい……

父 え？ なに？ 灰皿？ しよーがねえなあ、病人だと思つて人こきつかつてよ。ト、だれもたのんでもいないのにダン

ボールから灰皿を出し、得意気に母の手に) へへ。ほらよ。

灰皿だ。

母 形を指でなぞって) なんですか、これ？ おもしろい形。

父 だからよ、おまえ、これはな、東京タワー舞子さん付き灰

皿だ。へへ。これが売れるんだ、オリンピックでよ。外人

マンガの世界に登場人物たち——藤山教諭と生徒たち、
ぼくの父と母、松島とその父、医師と看護婦が壁のよう
に立ちただかり、田手上の姿をのみこむ。二人のぼくの
姿はない。

藤山教諭 彼方のヤスベーに。あんただね。子供拐かしては
チンチンちよん切るおじさんで。

ヤスベー 彼方に答えて。はい。ぼくはヒトサライです。

藤山教諭 あんた、子供好きなのか？ ほんとは好きじゃない
だろ。

ヤスベー わかりません。

松島 恋愛とは他人のなかへ潜りこもうとする傾向だが、芸術
とは自分のなかへ潜りこもうとする傾向である。

ヤスベー ボードレールですね。

母 あんた、なんか勘違いしてんじゃない？

藤山教諭 マンガは芸術とはちがうぞ。マンガは恋愛だ。

ヤスベー 少女マンガ、恋愛ですか？

藤山教諭 (一同) オリンピックまであと三十日！ さあ行
くぞ！ 出発！ ローレンローレンローレン……

父 ぼくを見て。なに黙って突っ立ってんだ。透明人間じゃ
ないんだろ？ ええ？ かあさんになんかいいいたいことなかっ
たのか、コージ……十円持ってないか。

ぼく ない。

父 ガックリと。そうか。

もう一人のぼく ぼく、あります。ハ、ポケットを探る。

父 いや、いいのいいの。

もう一人のぼく 十円玉をさしだし。どうぞ。

父 ……

もう一人のぼく どうぞ。

父 ぼくに。ちよんど手持ちが二十五円しかなくてさ。手術

終わったらかあさんにユカコーラ飲ましてやろうかと思っ

ただけんど。なあ、コージ、ユカコーラって三十五円じゃ

たよな。

ぼく ……

父 もう一人のぼくに。ペコペコと。すいませんねえ。

ぼく 蚊の鳴くように。おとうさん、イヤだ。

父 え？

父はもう一人のぼくの掌から十円玉を取ると、ダンボー

ル箱をかかえ逃げるように去る。

もう一人のぼく 梶くん。どうする？

ぼく ……

もう一人のぼく 表で待ってようか。

ぼくと乳母車を押したもう一人のぼくは、グルリと舞台を一周する。

同時に、上手から藤山教諭が生徒たちを従え、笛を吹いて走ってくる。

藤山教諭 ヨオ。梶くん。

もう一人のぼく ヨオ。先生。なんです？ オリンピックにも出るんですか？

藤山教諭 そうなんだ。

もう一人のぼく ええ！？

藤山教諭 タテガミ、選ばれてな、小学生の聖火リレー出ることにになったんだ。それで練習つきあってるんだ。

もう一人のぼく でも、タテガミくんは？

藤山教諭 後ろをふりかえりあれ？ おかしいなア。タテガミ。 ㄴ、探し タテガミ！

一同、タテガミの名を呼びながら場を探しまわる。

生徒たち タテガミを見つけ あ！

仕事机でヤスベーの手もとをのぞきこんでいた田手上

田手上 先生先生。私ね、小学校時代タテガメってあだ名、タテガメって。わかります？ 走るの全然だめだったです。

藤山教諭 彼方に) なアーんだタテガミ。そこにいたのか。

田手上 彼方からの声に ええ？

藤山教諭 タテガミ。なにしてたんだ。 ……オリンピック終わってちまうぞ。

生徒たち、マンガの世界からヤスベーの仕事部屋に乱入し、強引に田手上を担ぎあげる。

田手上 ウワアッ!? 先生ーッ! 田手上はマンガの世界にひきずりこまれた

ヤスベー 悲鳴に気づき、田手上くん!? ㄴ、中央へ

もう一人のぼく 妹？
ぼく うん。妹。
もう一人のぼく ヒミツ教えよか。
ぼく ヒミツですか？
もう一人のぼく ぼくな、おかんはアクセーションで死んだし、おとんは小さい小さいこんな小さい事業に失敗して人間蒸発やろ？
ぼく それがヒミツですか？
もう一人のぼく ぼくな、そのうち自家用車買おうと思って
ぼく でも、おたくまだ小学生だぜ。
もう一人のぼく だから、運転手付き。
ぼく ずいぶんちがいますねえ、東京タワー舞子さん付きと。
もう一人のぼく まあな。
ぼく 用務員さんのアルバイトってすごいんですねえ。
もう一人のぼく あれはボランティアやで。
ぼく そうですか。
もう一人のぼく 目的はこれや。

ト、乳母車にかかっていた布を取り去る。そこには山の
ようなコカコーラの空壇。

ト、下手に去る。
後には衣装まですっかりタテガミになった田手上が残る。
ヤスベー 田手上くん！
田手上／タテガミ (瞬彼方を見やるが、すぐに) ローレン
ローレン……ト、去る)
ヤスベーはマンガの世界にとびこみ、田手上の後を追って去る。
上手からぼくと乳母車を押したもう一人のぼくが歩いてくる。
もう一人のぼく 梶くん、もうすぐやねえ、オリンピック。
ぼく 壱ちどまりねえ、梶くん。ぼくの話ききますか。
もう一人のぼく きいてもええけど。
ぼく ぼくさ、きつといつかおたくにとってもひどいことする。
もう一人のぼく フーン。
ぼく ……怖いんだよ。
もう一人のぼく ぼくにもな、なんか怖いものがあるんやけど、それがなんかわからん。変な気分。いつも気にかかっている。何回か正体がかめそうなきもあつたんやけど、いつもも

うちよっとっていうところで逃げられてまう。……きのうも
な、そいつが夢に出てきた。
ぼく 夢ですかあ。
もう一人のぼく いけませんかあ。
ぼく 独白 どうしてみんな夢の話ばつかするんだ。
もう一人のぼく 今週はずっとそいつの夢ばかり見る。でも、
もうちよっとで見えるところで消えてしても目が覚める。いや
な気分やわあ。一度でええから正体見たいなあ。一度でええ
から。
ぼく そのうち見えますよ。
もう一人のぼく そうやといんですけどねえ。
ぼく 梶くん。
もう一人のぼく なアに、梶くん。
ぼく おたく、よく夢の話をする？ だから、友達なんかに。
もう一人のぼく したことないですわねえ。
ぼく ぼくに梶くんみたいに友達がいたら自分の夢は全部話す。
そう思う。でも、ぼくの夢は退屈だから、だから友達ができ
ない。そう思う。
もう一人のぼく ……
ぼく ぼくさ、いろいろな人に親切にしようって誓った。特に子
供には。

もう一人のぼく ええんちゃう。
ぼく 一人でもいいから友達つくって、ぼくのお葬式には絶対
出してもらう。葬式に友達が一人も来ないなんて、そんな死に
方いやですからねえ。
もう一人のぼく 夢は見る方？
ぼく きんうも見た。
もう一人のぼく どんな夢？
ぼく 三船敏郎の夢。
もう一人のぼく そいでどうした？
ぼく そいだけ。三船敏郎が映画と同じように出てくるだけ。
もう一人のぼく あちやー……。梶くんはさ、夢のなかにおっ
た？
ぼく いませんねえ。透明人間ですわねえ。
もう一人のぼく ぼくはな、自分の夢のなかに出てくる。
ぼく ぼくは映画みたいに見てるだけ。ぼくも出たいんだけど、
座席から動けない。じっと座って見てなきやなんない。映画
ならオセンベくらいあればいいんですけどねえ。
もう一人のぼく コカコーラとね？
ぼく まだ飲んだことないんですよ。
もう一人のぼく ええ！？
ぼく ぼくさ、おかあさんに子供が生まれると思ってた。

ト、半ズボンから剥きだしの足をだす。
ぼくはその足を打つ。

もう一人のぼく なでたみたい。なあ、なでたみたいや。
ぼく ……チクシヨー！

ト、杖を投げ捨て、拳でもう一人のぼくの顔を殴る。
ふたたび地面に倒れたもう一人のぼくの上にぼくは馬乗りになり、もみあいながらさらに殴る。何度も何度も…
…
下敷きになったもう一人のぼくのパンチがぼくに命中し、
ぼくはあっけなく地面をころがる。

もう一人のぼく 泥だらけになって起き上がり「こんなんちやう。
……こんなんちやうわ！

ト、上手へ駆け去る。
いれかわりに父が真の青な顔をして冷汗たらしながらやってくる。

ぼく ……？

もう一人のぼく 壘代十円。

ぼく ……？

もう一人のぼく 壘代一本十円。

ぼく もうやく理解してすげー！？

もう一人のぼく ぼく、用務員さんやる？ ぼくが処分するかわりに毎日タダでもらってる。職員室の机の下は宝の山やで。

空壘を一本さしだし「一本どうぞ。

ぼく いいですよ。

もう一人のぼく そのかし、職員室はぼくの縄張り。ト、渡す

ぼく 受け取った壘の中をのぞいて ……ア、やもり！？

もう一人のぼく え？ ト、のぞいて ……ほんまや！？ や

もりやなあ。

ぼく なにしてんでしようねえ。

もう一人のぼく ずいぶんデカいなあ。

ぼく なに食べてんでしようねえ。出てきませんねえ。

もう一人のぼく 出られへんねんや！？ なかでデカくなりすぎ。

ぼく こいつ、高度成長ですね。

もう一人のぼく このままやと死んじゃうなあ。

ぼく どうして？

もう一人のぼく なんでも。死んじゃうなあ。
ぼく 死なないよ。
もう一人のぼく 死んじゃうよ。
ぼく 死なない。
もう一人のぼく 死ぬよ。
ぼく 死なないんだ！

ト、思い切りもう一人のぼくを突きとばす。
もう一人のぼくは地面にころがる。

間。もう一人のぼくは、黙って起き上がり服の泥をはらっている。

もう一人のぼく ……梶くん。きみ、ケンカつよい？ いまま
でだれかに殴られたことって、ある？ 家でぶたれたことは？
おとん、ぶったりせえへん？

ぼく すげーよ。うちのおとうさんのパンチ。
もう一人のぼく ええなあ。ぼくはな、一度もない。だからわ
からへんねん、ぶたれるってどんな感じか。経験したくて、
よく自分でぶつてみるんやけど…怖い？ ぶたれるとき
て。乳母車の旗を取り、たとえばこんな枝なんかで。ト、
杖を鞭のようにふりまわし、ウン。けっこうしなるわ。

ぼく 血がでるね。
もう一人のぼく ぶつてみたない？ これで
ぼく だれを。
もう一人のぼく ぼくを。
ぼく 変なこと、いうなよ。
もう一人のぼく 変かな。
ぼく ぶたないよ。

もう一人のぼく ぶつてもええっていつても？
ぼく ぶたないよ。

もう一人のぼく ぶつてくださいってお願いしても？
ぼく どうかしてるよ。

もう一人のぼく だってぼく、一度もぶたれたことないねん！
ぼく そんなのひとにたのむなよ。

もう一人のぼく お願い。…お願い。
ぼく じゃあ、そんなお願いできないようにしてやるよ。

ト、杖を取り、もう一人のぼくの尻をチョンと打つ。

もう一人のぼく なんともないで。
ぼく 服の上からだもん。
もう一人のぼく じゃ、足ぶつて！

ぼく 何万分の一かあ。国鉄スワローズが優勝するようなものだね。ムリだよ、絶対。もし国鉄が優勝するくらいなら、ぼくが聖火リレーのランナーやってるよ。

タテガミを先頭に、藤山教諭と生徒たちが走ってきた。いつの間にかヤスベエの仕事机に出前の女が座り、ニューボトルの一升瓶をラッパ飲みしながら原稿を読んでいた。今度の出前の女はもう一人のぼくによく似た出前の女3である。

タテガミ みんな！ こっちだ！
出前の女3 ペンを執り！ ボキッ！ ……ときたね。

ト、原稿に勝手に手を加えたとなん、いきなりタテガミがドドウとこける。

藤山教諭 アアッ、田手上が足の骨折っちゃった！？

タテガミ 先生。おれはもうダメだ。

藤山教諭 なんの脈絡もなくいきなりぼくに 梶くん。きみだ！ きみが走るんだ！

田手上 たのんだぞ、梶！

ぼく ギョツとして）おかあさん……死んじゃったの！？
父 いや、手術が長引いてさ、まだ当分かからしいや。——
コージ、おまえ、十円持ってないか？

ぼく ないっていったじゃないか？

父 ウン。わかっている。もしかしたらと思っ

ぼく おかあさんのコカコーラは？

父 なんだ？

ぼく 手術終わったら飲ませるんだって。

父 バカ。手術の後にそんなもん飲めるか。

ぼく さっきのお金？ パチンコやったな！？

父 だって、おまえ、まだ当分かかっていうし……

ぼく 負けるってわかっているのに。

父 脊をたれ）すまない。

ぼく おとうさん……

父 置き忘れられた乳母車に気づき）……？

ぼく 背中に隠して）これはダメだよ。

父 なんだ？

ぼく 梶君のだから。

父 空壇の山を見て）どうすんだ、これ、こんなに。

ぼく 壇代 一本十円。

父 乳母車に手をかけ）そうか。壇代 一本十円かあ。……

ぼくの頭に、黄昏の町を乳母車を押し走り去る父も
う一人のぼくの前で地面に土下座して許しを乞う父……
の姿が浮かぶ。

ぼく おとうさん、イヤだあ！ ドロボウしちやイヤだあ！

父 ……バカッ！ 忸、手をふりあげる

ぼく ぶつてもいいよ。お願い。ぼくをぶつて！

父はぼくを殴ることができなかった。父はふりあげた手
をおろしジッとそれを見つめて……

父 不意に あれ！？ 箱は？ ダンボール箱。東京タワー

舞子さん付き……し、しまったッ！？ パチンコ屋に忘れて

きちまった！？ 忸、血相かえて駆け去る

ぼく 独白 おとうさん。……ガンバッテ。

いつからか下手にヤスベーが立っていた。

ヤスベー コウちゃん。

ぼく おじさん。忸、胸にすがり、泣きながら わからないん

だよ。ぼく、人間なんて変な生き物に生まれたくなかった。
鉄か岩かトタン板か、死ななくてもすむ物になりたい。どう
せ死んじゃうなら、はじめから生まれてこなけりゃいいんだ。
ヤスベー ……コウちゃん。

ぼく どんどんわからなくなる。大人になったらもつとわから
なくなると思う。わかっているのは、きつといつか、だれかに
とつてもひどいことする。それだけ。

ヤスベー やさしくぼくの頭を胸に抱きしめ きこえるかい、
コウちゃん。

ぼく 顔をはなし、ヤスベーを見て ……？

ヤスベー イタリアの物語の主人公は恋人の胸のなかに海の響
きをききました。きみはコウちゃん。なにがきこえる？

ぼく あたたびヤスベーの胸に耳をつけ ……ロケットだ！？

ヤスベー え？

ぼく 宇宙ロケットだよ。ドキッとして おじさんの心臓 ぼ
くと反対側にある……

ヤスベー そ、それは、ホラ、床屋さんの鏡のなかでは時計の
針は反対にまわるだろ？

ぼく どういうこと？

ヤスベー だから、つまり、何万人に一人かはこういうおじさ
んもいるってことさ。

と善人の幸せってわけ？
ヤスベー ぼくにはどうすることもできないんだよ……つて
きみ、さっきのソバ屋さん？
出前の女3 店に寄ってさ、ちよつと変装してきたのよ。
ヤスベー きみ、やめた方がいいよ、変装。
出前の女3 ほつといてよ。いろんな自分に出逢えて楽しいじゃない。
ヤスベー 自分がたくさんいるんだ？
出前の女3 そおよお。神様の自分に家来の自分にその他いろいろ。やあねえ。先生がそうやって描いたんじゃない。
ヤスベー ぼくは「わかりません」て、描いたんだ。藤山教諭の口真似で。もう一人のぼくが二人なのかもつとたくさんなのか、いまはまだ先生にはわかりません。
出前の女3 原稿をトントンとそろえ、さしだして。ハイ。
先生、これ。ナ、渡して。途中ちよつと描きなおしたけど。だって、暗いんだもん、先生のマンガ。
ヤスベー 描きなおしたってきみ……原稿をめくり、驚いて田手上くん？
出前の女3 ああ、彼ね。家出させたわ。悟っちゃったのよ。このまま生きてても、結局自分は将来売れないマンガの編集者になるのがおちだつてね。

そこへ父が駆けこんでくる。
父 震えて。コージ。なくなっちゃった。東京タワー舞子さん付き灰皿が灰になって消えちゃった。おとうさん、パチンコ屋でおまえ勝手口のゴミ箱まで探したんだ。そしたらよー
出前の女3 さらに原稿に手を入れ。チーンジャラジャラ……とね。
父 腹巻きをめくると札束がジャラジャラこぼれ。百万円拾っちゃった！
そこへ医師と看護婦が沈痛な面持ちでやってくる。
医師 父に。梶さん。……
父 せ、先生！？
医師 申し訳ありません。あらゆる手をつくしたのですが、奥さんは——
出前の女3 調子にのつてペンをはしらせ。ケロツと——
医師 全快しました！

母がスキップふみながら登場。トンボまできつてみせる。

父 ヨキコ！？

母 あなた。……コウちゃん。抱き合おう家族)

出前の女3 原稿の上に書き加えながら) こうして……奇跡
は……起こったのです。

デタラメな事の成り行きをなすすべもなく見まもつてい
たヤスベー、ようやく出前の女3に気づき、机に駆け寄っ
て――

ヤスベー やめろ！

ト、ペンを取りあげる。

ぼくは父と母の手を握り、彼方を見はるかすように立ち
つくした。

つるべ落としの秋の空の下で、電信柱の裸電球が急に明
るくなったような気がする。その仄明かりのなかにヤス
ベーは影のように立つ。

登場人物たちはスミレ色のシルエットになり、一人また
一人と消えてゆく。

ヤスベー それは、空を飛ぶ黒いものが夢のように思えたり、
町はずれの街灯の下にはきつとだれかの影法師が落ちていた
りした、そんな日暮れのことでした。

ぼく ほら、おとうさん。ずっとずっと向こうの地平線。あ
れは雲かねえ。それとも山かねえ――

ヤスベー こんな夜こんなふうに分が空をながめているのは、
実ははるかに遠い未来の夜であり、しかもそこは星の世界の
都会ではなかるうか。コウちゃんはそんな気がしてなりませ
んでした。

ぼく ねえ、おかあさん。百年たったら、宇宙ロケットにのっ
て、みんなで火星や土星やどこにでも行って暮らしましょう。
おとうさんも、おかあさんも、松島トモコも連れていきましょ
う――

ヤスベー 明くる日、コウちゃんのおかあさんは車にはねられ、
そして、二、三日目に三十六で亡くなりました。

マンガの壁がぼくたちをのみこむ。

ヤスベーと出前の女3だけが残された。

出前の女3 これが先生のいう、この地上における正義の勝利

松島の父　そうですか。あれは正田美智子さんが結婚した年でした。五年、いや？　六年前かなあ。この店に強盗がはいりましてね。殺されたんですよ、家内は。ちょうど　ト、ぼくの左胸をさし　ここ、刺されちゃったさ。

ぼく　……

松島の父　こんな店、いってくれたら、そこらにあるもん残らず持ってたって、こっちは黙って見てたのに。黙って見えないで手伝え、なんていわれたらそりゃ怒っちゃうけどさ。だって、そんなことしたら汗かいて服が汚れるもんねえ。

松島の父は、自分のことぼがおかしくてたまらないふう
に涙を流して笑う。
笑うと悪魔のようになるその顔を、ぼくは肩をすくめて
見つめている。

松島の父　もうやくぼくの存在に気をもどし　ユカコーラ、
飲みますか。

ぼく　はい。

松島の父　持ってきます。ト、去らんとする
ぼく　待ってください。ポケットからユカコーラの空き壺を出
し　これ。

マンガの壁が割れタテガミが登場。彼方を双眼鏡でのぞ
いている。

出前の女3　彼、天文学者になるんだって。

ヤスベー　天文学者？

出前の女3　だれかが書いてたでしょ。大生になんの興味もな
いときにだけ、人は童話の天文学者になります」……でも、
たいした学者にやなれなかったわ。彼ね、どうしてもオリオ
ンと北斗七星の区別がつかなかったの。それに、どうしても
北斗七星がヒシヤクに見えるつてことが理解できなかったの。
タテガミ　彼方に　さよーなら、先生！

ト、マンガのなかに消える。

ヤスベー　彼方に　田手上くん！

出前の女3　それから、ユウちゃんのおとうさんね、拾った百
万円でリヤカー一杯灰皿つくって代々木の方向に去っていつ
たわ。

マンガの世界にダンボール箱を山積みしたりヤカー引い

て父が登場した。

父 えー、東京タワー舞子さん付き灰皿だよ！ ジャパニーズ・
ダンシング・ベイビー！ マイコサンだよ……

出前の女3 おとうさんは二度とコウちゃんのもとにはもどり
ませんでした。はやい話、人間蒸発ね。

父、リヤカーを一回転。すると荷台にぼくが座っていた。

ぼくはリヤカーをとびおり、去ってゆく父の後ろ姿を見
送っている。

ぼくの目の前でマンガの壁が閉じ、父をのみこむ。

ヤスベー コウちゃんは？

出前の女3 終わりだけはいくらあたしだってどうにもできな
いわ。だって先生、このマンガ、終わりから描きはじめたん
でしょ？

ヤスベー ……

出前の女3 さあて、そろそろ帰るかな。ト、上手へ去りなが
ら、そしてついに、トツキトーカがめぐってまいりました。
ヤスベー 待ってくれよ。

出前の女3 ありがとう。西暦一九六四年十月十日。——先

生。オリンピック始まるわよ。

ト、去る。

その十一 コカコーラ殺人事件

高らかに鳴りわたる東京五輪ファンファーレとともにマ
ンガの壁がゆっくりと割れ、すき間から光の筋がさしこ
む。その逆光のなかを黒い影がぼくに近づいてくる。や
がて影は松島の父になる。
そこは松島の父のなんでも屋の店先。

松島の父 やあ、来てくれたんですか。

ぼく ……

松島の父 天気でよかったねえ、オリンピック。

ぼく ほかに話すことも見つからず、おぼさんはいないん
ですか？

松島の父 あれ？ トモコはなにもいってませんでしたか。
ぼく ……

ぼく ジャブジャブ池、行きませんか。
もう一人のぼく 行ってもいいですよ。
ぼく マッチがあるんだ。
もう一人のぼく パイプ・マッチですか。
ぼく 家に行けばペンシルキヤップもあるし。それから、セル
ロイドの下敷きもあるぜ。
もう一人のぼく セルロイドの下敷きを細かく切りますかあ？
ぼく ペンシルキヤップにマッチの火薬と一緒に詰めますよお。
もう一人のぼく 宇宙ロケットのできあがりですねえ？
ぼく ジャブジャブ池は宇宙ロケット日和ですよお。
もう一人のぼく 宇宙ロケット、発射しますかあ？
ぼく 宇宙ロケット、
ぼくたち 発射しますよおッ！

行進が終わり、ぼくたちはロケットの発射準備にとりか
かる。ズロローグの反復だ)

ヤスベー 西暦一九六四年十月十日。ウオストークにのったガ
ーリンが宇宙旅行から戻って三年。だのに、そのころぼく
たちはといえ、まるでペンシルキヤップのように貧弱なロ
ケットの発射実験に何度も何度も失敗していました。はじめ

松島の父 なんです？
ぼく 足りない分は、また今度持つてきますから。
松島の父 壘代一本十円か。気イばかしつかつてると立たなく
なるよ。ト、壘を受け取り)……？ 壘のなかをのぞき
ヤモリですね。
ぼく はい。ヤモリです。
松島の父 壘を振り)……死んでますねえ。なかでデカくな
りすぎたんですねえ。
ぼく 高度成長なんです。
松島の父 ヤモリのミイラに口汚く) バカヤローが。こんな
なかにおいてどうしてデカくなれたんだよオ。そんなにコココー
ラが好きなのか、テメェ このヤロー。
ぼく あのお……
松島の父 はい。
ぼく コカコーラ、やめました。
松島の父 コカコーラ、飲まないんですか。
ぼく そのかわし、いいでしょうか。
松島の父 なんですか。
ぼく マッチもらえますか。
松島の父 マッチ？ パイプ・マッチでいいですか？
ぼく はい。パイプ・マッチでいいです。

松島の父は去る。

ヤスベー もしぼくがああるときあの一本のコカコーラを飲んで
いさえすれば、おそらく、少年野球史上不滅の四番打者が誕
生し、お座敷小唄で始まる生徒総会は学校の名物行事にな
り、日本コカコーラ・ボトリングは空き缶回収のための予算
削減に成功し、そして、蛸山写真館の主人は卒業写真の松島
トモコの黒枠の隣に、もうひとつの黒枠をはめこむ手間から
解放されたはずなのです。もしぼくがああるときあの一本のコ
カコーラを飲んでいさえすれば……

松島の父、パイプ・マッチを持ってもどってくる。

松島の父 はい。パイプ・マッチ。

ぼく ありがとう。

松島の父 マッチなんかどうするんです？

ぼく ロケットをつくるんです。

松島の父 ロケットですか。

ぼく はい。ロケットです！

クイック・マーチがながれる。厭世的な。
ぼくは音楽にのり彼方へ向けて足踏みをはじめ。
ぼくの背後から複数のぼくが列をなして行進してくる。
もちろん、もう一人のぼくも一緒だ。

松島の父 ぼくの背中に おーい！ ジャブジャブ池には近
づくなよ！

ヤスベー そうです。たしかに松島のおとうさんはそう叫んだ
のです。『いか。ジャブジャブ池だぞ！』もしぼくがあのと
きあのことばをきいていなければ、ぼくの計画は勉強机の上
の空想で終わっていたでしょう。松島が溺れて以来、ジャブ
ジャブ池は立入禁止になりました。子供だけでなく、もちろ
ん大人もです。だから、絶対ジャブジャブ池なら——
松島の父 いいか。ジャブジャブ池だぞ！

松島の父、行進の陰に消え去る。

ぼくともう一人のぼくと複数のぼくたちは肩を並べ大地
を踏みしめて行進する。

ぼく 梶くん。

もう一人のぼく なアに、梶くん。

ヤスベー、書き上げた原稿をまとめ、目でマッチを探す。
落ちているマッチに気づき、机を離れて近づきながら――

ヤスベー ぼくはいまでも、ニジッセイキの悲しみが交錯した
ような青い都会の夕べ、街角のプラタナスの下でふるえている
白い電灯を見ると、なぜかコウちゃんが泣いているように
思われてなりません。

ヤスベー、マッチを拾い、原稿を小脇に抱えると、シュツ
と火をつける。

同時に、暗転。

原稿を燃やそうとするヤスベーの顔だけが、かすかな炎
に浮かぶ。

ヤスベー さよなら、ニジッセイキ。

そのとき、どこからともなく声たちが――。

声たち よろしく！

から負けるとわかっているならやめちまえばいいのに。西暦
一九六四年十月十日。国鉄スワローズが優勝を逃した最後の
年。その翌年、国鉄スワローズはサンケイイスワローズと名前
をかえました。タケゾーがムサシへと名前をかえ、そして、
国鉄は新幹線の家来になったのです。ジェット機のように
やい未来の列車新幹線は、コウちゃんのおとうさんの東京タ
ワー舞妓さん付き灰皿のように、国鉄の貯金をつかいはたし
てしまいました。でも、そんなことはどうでもいいのです。
宿命の白い煙をはいて突き進むコウちゃんの宇宙ロケットの
軌跡を、ぼくは見届けなくてはならないんだ！

ぼくたちはカウントダウンをはじめていた。

ぼくたち ……5、4、3、2、1、発射！

轟音と煙を吐いて、ロケットはストロボの明滅するなか、
あてどなく舞台をさまよひ、そして、ついに自らの終局
の目標を発見、すなわち、もう一人のぼくの顔面めがけ
て……。

ぼく イヤだーッ！

衝撃音とともに大黒幕が開き、場が深紅に染まる。
もう一人のぼくの目から噴き出した血潮が天高く血煙を
上げる。

背景のマンガのコマには顔に包帯を巻いたぼくたちが、
影絵のように立っている。

もう一人のぼく 梶くん、宇宙ロケット、命中したぞ。

顔を血に染めたもう一人のぼくは、そのまま倒れて息
絶える。

同時に明かりがもどると、ぼくはなすすべもなく立ちつ
くしていた。

ぼく 梶くん。……ねい、こっちを見てよ。……ぼくが見えま
すか？ ……おたく、転校してこなきゃよかったですねえ。
永遠の遠国にいれば、よかったですねえ。……おたく、死ん
だら、あの夢もう見なくていいんですねえ。ぼく……マッチ
じゃなく、ユカ・コーラもらえばよかったですねえ。

ぼくは泣きながらパイプマッチを投げ捨てる。

同時に、ぼくたち、包帯を「別れの紙テープ」のように
ぼく目がけて投げる。

ぼく ねい、梶くん、ぼくが見えますか？

ぼくは包帯を拾うと、自分の顔にグルグル巻き始める。

ぼく ほら、ね、見えますよ。こうすれば、ぼくのこと、きつ
と見えますよ。……だって、ぼく、透明人間やねん。今日か
らぼく、ホンモノの透明人間やねんッ！

ぼくたちは白樫に入り、プロローグと同じポーズ。
ぼくもぼくたちも、すべてが影絵のようだ。

電柱のほの暗い電灯のもと、ヤスベーが語りだす。

ヤスベー われ思う、夢にわれあり。夢の町で出逢ったからと、
今日も白くふるえる街灯の下であの子はぼくを待つのでしよ
うか。だれかの夢に見られたぼくと、そのぼくの夢に見られ
たもうひとりのぼくと、ぼくと、ぼくたちの物語は、これで
終わりです。

それはヤスベーのマンガの登場人物たちだった。

ヤスベー ポツリと 我ハ汝ヲ、愛ス者ナリ！

白樫の中心のコマから顔中真っ赤にしたもう一人のぼくが登場。

もう一人のぼく 梶くん、もうすぐやねえ、オリンピック。

東京オリンピック行進曲が流れる。

背景 ホリゾン（ト）に影絵の日章旗 白地に黒丸）が浮かぶ。

もう一人のぼく、ヤスベーに近づき、鉛筆を差し出し、ペンシルキャップを外すと、それを放り投げる。

ヤスベーは、鉛筆を受け取り、白樫に入り、鉛筆でマンガを描き はじめる。

同時に、登場人物たち、白樫の中に入り、セリフを語りだす。

おじさん4/母 コウちゃん、はやく食べちゃってよ。

おじさん5/松島 梶くん、大事にするからね、これ。

ヤスベー え？ ——アチチ……

ト、マッチ棒を机の上の灰皿に落とす。
和太鼓の音とともに声たちのカウントダウンがはじまる。

声たち テン、ナイン……スリー、トウ、ワン、ゼロ！

耳をつんざく花火の音。

場は、お祭り気分の照明に照らされる。

ヤスベーは、絵の描かれた白樫の中心に立っていた。その姿は、コウちゃんだった。

白樫のまわりには、画帖をかかえたコート姿のやさしいおじさんが立ち、ヤスベーを見守っていた。それも一人

や二人ではない。五人もおじさんたち 1||藤山教諭・
2||松島の父・3||父・4||母・5||松島) だった。

ヤスベー ……おじさん？

おじさん1 ニジ ユーイッサーキに！

声たち よろしく！

おじさん2 さあ、アゴをあげて。

おじさん3 勇気があるかい？

おじさん4 ついてくるね。
おじさん5 ヨウちゃん。

そう呼ばれて、ヤスベーは自分の変身ぶりに気づく。
おじさんたち、口々に「ヨウちゃん」と呼びかける。

ヤスベー ねい、おじさん。おじさんはマンガ、好きですか？
おじさんたち ……

ヤスベー ぼくね、マンガは随ちるところまで随ちればいいと思っ
てる。マンガなんか読む人が一人もいなくなればいいと思っ
てる。そうならないかぎりマンガは……

おじさんたち ……

ヤスベー ぼくね……ぼく、たくさん殺しちゃった。……事故
や病気に見せかけ……あるときはペンシルキヤップのロケッ
トで。

ヤスベーはすべてを消し去ろうとするように、白枠の絵
を塗りつぶす仕草。白枠の絵がどんどん薄くなってゆく。

ヤスベー こうするしかないんだよ。ぼくは……ぼくは……ぼ
くは……

そのとき、ヒュンと音がしてなにかがヤスベーに衝突す
る。

ヤスベー イタ！

ト、思わず目を押さえる。

追い打ちをかけるように、ヒュン！ヒュン！と銀色に
光る物体がヤスベー目がけて飛んでくる。

ヤスベーは白枠から出て、物体を拾い上げる。

ヤスベー ペンシルキヤップ！？ ……どうしてぼくはこんな
もので人が殺せると思ったんだろう？

ト、可笑しさがこみ上げ、声を上げて笑いだす。

おじさん1 呪文めかして アノクタラ・サントシル——

おじさんたち ソワカ！

雷鳴とともに、おじさんたち、一斉に帽子とコートを脱
ぎ捨てる。

り、ヤス

ベーが舞台奥から歩いてくる。

ヤスベーたち、手を握り合う。

ヤスベー2 観客に）ありがとうございます。

登場人物たちもやってきて、カーテンコール。
電話に怒鳴りながら田手上がもどってくる。

田手上 テメエぶっ殺すぞ！ ヤスベー先生が描くって言うて
んだ！ だまって待ってろ！

田手上、登場人物たちに気づく。

一同に手招きされ、田手上もカーテンコールに加わって

幕。

おじさん2／松島の父 ジャブジャブ池には近づくなよ。
おじさん1／藤山教諭 それは梶くん、死人にクチナシだ。
おじさん3／父 おい、きいてんのか、アホーっていったんだ
ぞ！

登場人物たち、口々にセリフをしゃべりながら踊りだす。

ヤスベーは、なおもマンガを描きつつける。猛烈な勢いで。一心不乱に。

ヤスベー、ふと手を止め、空を仰ぐ。

その体に無数のペンシルキヤップが降り注ぐ。

次第に世界は色を失い、セピア色の一枚の写真になる。

暗転。

エピローグ

闇の中から笑い声。

ヤスベーの仕事部屋が明るくなる。

ペンシルキヤップを天にかざし笑っているのは、ぼくによく似たヤスベールだ。
傍らには、電話で編集長と話している田手上。

田手上 ……だから、先生がいま何本連載抱えてるか知ってるでしょ、編集長だって！ 8本ですよ、8本。……そこをなんとかあと30分。いま最後のページまでできてるんですから。——電話を離し、ヤスベールに先生、笑ってないで仕事仕事。——

ヤスベール2 まとめた原稿をさしだし はい、これ。

田手上 完成ですか！！！！——ト、受け取り、再び電話に間に合ってます！ ……はいすぐタクシーで戻りますから。

ト、電話を切り、原稿をチェック。
ヤスベール2はコートを着て帽子をかぶる。
原稿を見た田手上の顔が青ざめる。

田手上 なんです、これ！ 全然別の……新しい話じゃないですか！

ヤスベール2 いいだろ、そっちの方が。

田手上 そういうことじゃなくて——

ヤスベール2 編集長に言つてよ、今夜中に描き上げるからって。
田手上 大変だ、こりや。ト、電話をかけ……あ、もしもし、編集長に代わって……

ト、話しながら退場。
ヤスベール2は、画帳を抱え、舞台中央へ。

ヤスベール2 ……背景に向かい。ボール紙を切りだしたような町なみに、いまでも沈んでゆく夕陽。電信柱を示し、まだ電信柱の裸電球に灯はともらない。薔薇色の西空の下では、三角ベースのゴムまりも、豆腐屋のラップも、郵便ポストも、走りすぎる自転車オートバイの後姿も、みんな一様に限界を喪失してゆく。……そんなつかのまのニジッセイキの都会の空に、ペンシルキヤップのロケットをとぼしてみたい。子供はそう思った。子供はいっだってなにかをとぼしてみたいと思うものだ。そして、ペンシルキヤップのロケットとは、そんな彼らにとって、生と死のたまゆらに未来を望む飛行者のための偉大な乗り物だったのである！

クラップが聞こえる。
ヤスベール2がふりかえると、ダイアナ・ロスの歌声にの